



文化財愛護
シンボルマーク

く でん
久 傳 遺 跡

2006年3月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例 言

1. 本書は、株式会社エステートバンクの依頼を受けて、松江市教育委員会と財団法人松江市教育文化振興事業団が平成16年度に実施したシンフォニータウン国屋造成事業に伴う久傳遺跡発掘調査の報告書である。

2. 調査の組織は下記の通りである。

依頼者 株式会社エステートバンク

主体者 松江市教育委員会

事務局 松江市教育委員会 教育長 山本 弘正

文化財課 課長 岡崎雄二郎

係長 飯塚 康行

実施者 財団法人松江市教育文化振興事業団

理事長 松浦 正敬

専務理事 田中寿美夫

事務局長 長野 正夫

調査係長 瀬古 謙子

嘱託員 陶山 隆

3. 調査の実施及び報告書の作成にあたっては、下記の方々より多大なご指導、ご教示、ご協力をいたしました。記して感謝の意を表したい。(順不同)

東森晋(島根県教育庁)、岩橋孝典(同)、山根克彦(島根県文化財保護指導委員)、宅和紳(土地所有者)、藤原定泰(法吉・白髪・真山の自然と文化を育む会)

4. 調査参加者は下記の方々である。

[現地調査] 岡礼二、小川真由美、杉原正、杉原文子、時安順子、細田信子、細田勇治、向井郁夫、吉岡永子、渡部孝次

[遺物整理] 飯野正子、中谷美枝子、松尾澄美

5. 本書挿図中の方位は第Ⅲ座標系の軸方位、レベルは海拔高である。

6. 本書で使用した遺構記号は、以下の通りである。

P…ピット、SB…掘立柱建物跡、SK…土壙、SD…溝

7. 本書の作成には主に以下の者が携わった。

[遺物の実測] 廣濱貴子、善家幸子、高尾万里子、井上喜代女

[遺構・遺物の浄書] 時安順子、飯野正子、松尾澄美、北島和子

[写真撮影] 陶山隆、廣濱貴子、石川崇、瀬古謙子

[執筆・編集] 瀬古謙子

8. 出土遺物・実測図面・写真等は、松江市教育委員会で保管している。

本文目次

I 調査に至る経緯	1
II 位置と環境	2
III 調査の概要	
1. 調査区の設定と調査の経過	5
2. 検出した遺構と遺物	
(1) A - 1 加工段	8
(2) A - 3 加工段	14
(3) B - 1 加工段	18
(4) C - 1 加工段	18
(5) C - 2 加工段	24
(6) A - 3 区小加工段	28
(7) 遺構外の出土遺物	28
IV 結び	30
遺物観察表	31



第1図 松江市位置図

挿 図 目 次

第1図	松江市位置図	
第2図	久傳遺跡位置図（1／50,000）	1
第3図	周辺の遺跡	3
第4図	久傳遺跡位置図（1／2,500）	4
第5図	久傳遺跡調査前測量図	5
第6図	久傳遺跡調査成果図	6
第7図	A-1加工段実測図	7
第8図	A-1加工段SB-01実測図	8
第9図	A-1加工段SB-02実測図	9
第10図	A-1加工段第1遺構面遺物出土状況図	10
第11図	A-1加工段第2遺構面遺物出土状況図	11
第12図	A-1加工段第1遺構面出土遺物実測図（1）	12
第13図	A-1加工段第1遺構面出土遺物実測図（2）	13
第14図	A-1加工段第2遺構面出土遺物実測図	14
第15図	A-3加工段SB-03実測図	15
第16図	A-3加工段遺物出土状況図	16
第17図	A-3加工段出土遺物実測図	17
第18図	B-1加工段SB-04実測図	19
第19図	B-1加工段出土遺物実測図	19
第20図	C区加工段全体図	20
第21図	C-1加工段遺物出土状況図	21
第22図	C-1加工段SB-05実測図	22
第23図	C-1加工段SB-06実測図	22
第24図	C-1加工段出土遺物実測図	23
第25図	C-1加工段西側出土遺物実測図	24
第26図	C-2加工段SB-07実測図	25
第27図	C-2加工段出土遺物実測図	25
第28図	C-2加工段・C-1加工段上層遺物出土状況図	26
第29図	C-1加工段上層出土遺物実測図	27
第30図	A-3区小加工段実測図	28
第31図	遺構外（A-1加工段上層～東側斜面）出土遺物実測図	29

写真図版目次

- 図版1 久傳遺跡調査前
久傳遺跡調査後
- 図版2 A-1加工段第1遺構面 (SB-01, 02)
- 図版3 A-1加工段第1遺構面溝内遺物出土状況
A-1加工段遺物出土状況
- 図版4 A-1加工段第2遺構面
A-1加工段第1遺構面と第2遺構面の溝の切り合い
- 図版5 A-3加工段総柱建物跡 (SB-03)
同上 壁際埋土中遺物出土状況
- 図版6 B-1加工段平面プラン検出時
B-1加工段掘立柱建物跡 (SB-04)
- 図版7 C-1加工段全景 (SB-05, 06)
- 図版8 C-1加工段平面プラン検出時
C-1加工段堆積土層と遺物出土状況
- 図版9 C-1加工段～C-2加工段
C-2加工段 (SB-07)
- 図版10 C-2加工段遺物出土状況
A-3小加工段
方形土壙
- 図版11 A-1加工段第1遺構面出土遺物 (1)
- 図版12 A-1加工段第1遺構面出土遺物 (2)
- 図版13 A-1加工段第2遺構面出土遺物
- 図版14 A-3加工段出土遺物
B-1加工段出土遺物
- 図版15 C-1加工段出土遺物
C-1加工段西側出土遺物
- 図版16 C-2加工段出土遺物
C-1加工段上層出土遺物
- 図版17 C-1加工段上層出土遺物
A-1加工段上層～東側斜面出土遺物

I 調査に至る経緯

久傳遺跡は松江市の市街地から西北方向へ約2kmの比津町567番地に所在する。現況は山林である。

本遺跡を含む国屋町、比津町の低丘陵地において、株式会社エステートバンクにより（仮称）国屋団地造成事業が計画され、平成15年2月埋蔵文化財の分布調査依頼書が提出された。これを受け、松江市教育委員会が同年3月、4月に試掘調査を行った結果、遺跡は発見されなかった。

その後開発計画区域が一部変更となり、新たに拡大された部分について平成16年2月23日付でシンフォニータウン国屋造成事業として埋蔵文化財の分布調査依頼書が提出された。同年3月から5月にかけて松江市教育委員会が現地踏査したところ、谷部東向き斜面に傾斜のゆるい地形が認められたため、同月試掘調査を実施した。その結果、トレント5ヶ所で遺物包含層及びピットや溝状遺構などが検出され、住居跡などの古墳時代の遺跡が存在することが推定された。これにより、平成16年度に松江市教育委員会の委託を受けた財団法人松江市教育文化振興事業団が、対象地520m²の発掘調査を実施することになったものである。

発掘調査は平成16年10月4日から12月27日までの約3ヶ月を要して実施した。調査面積は当初の予定より若干拡張した結果、630m²となった。



第2図 久傳遺跡位置図 (1/50,000)

II 遺跡の位置と歴史的環境

久傳遺跡（1）は松江市街地北西部の比津町567番地に所在する。

島根半島の北山山系の前面に東西に連なる山塊からは多くの支脈が南に向かって伸びているが、その支脈のうち比津丘陵からさらに南西に伸びる丘陵とそれにはさまれた谷底平野を含む一帯に比津町がある。北側の比津丘陵には比津ヶ丘団地、西側の丘陵には松江ゴルフ場が開発されている。

遺跡は松江ゴルフ場の南東側に位置し、標高30m余りの低丘陵に囲まれた北に落ちる小さな谷の東向き斜面に立地している。遺跡の標高は13~20mである。谷の出口には廻田池がある。

遺跡近辺の発掘調査例はほとんどないが、遺跡北方の丘陵地や谷部では宅地開発が進んでおり、また春日町から薦津、浜佐田に抜ける農道整備などにより、周辺地域の発掘調査例は増えてきている。

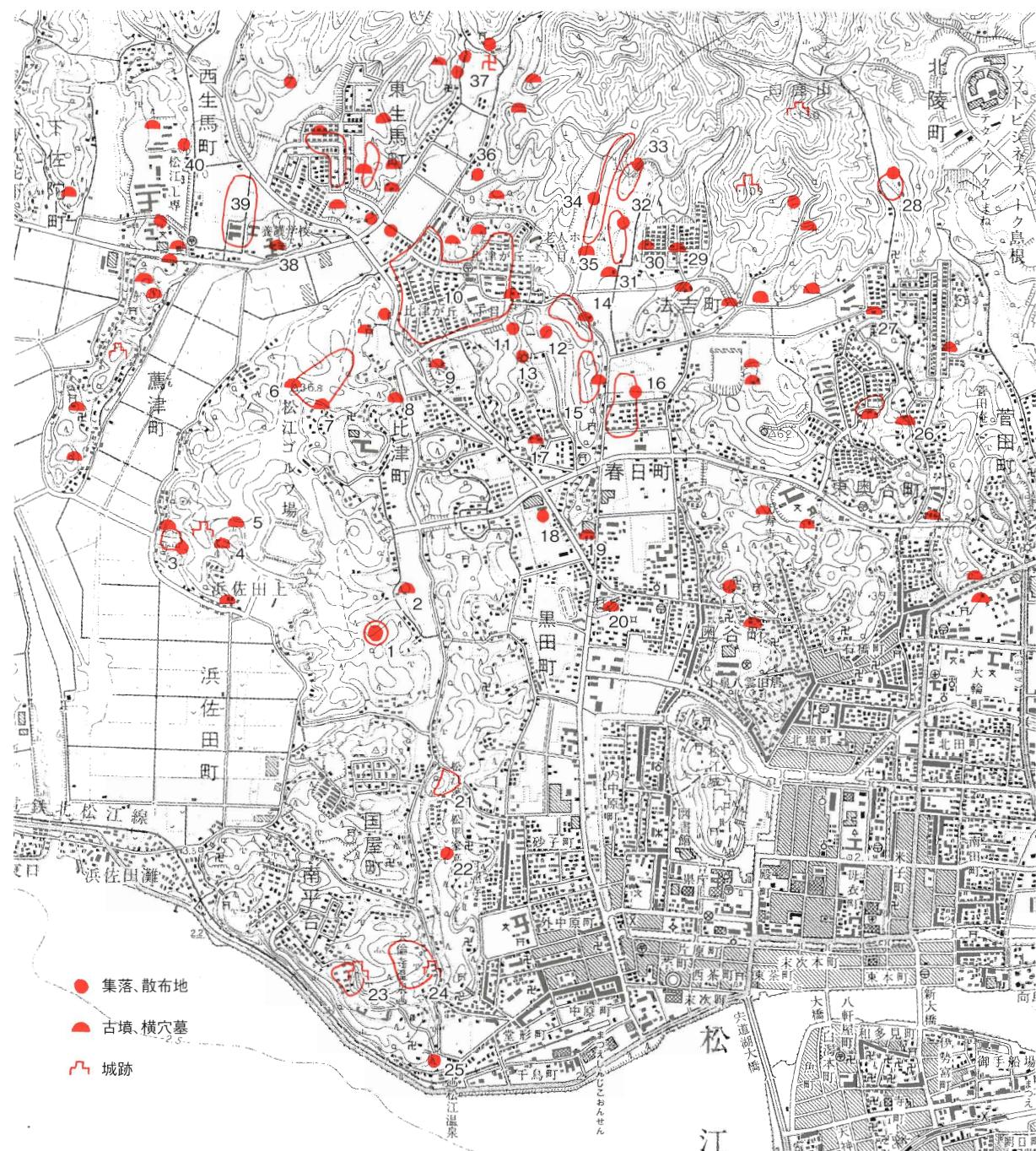
周辺の遺跡について時代を追って概観すると、まず後期旧石器時代の石器が東生馬大門の林道工事で発見されている。安山岩製の尖頭器である。白鹿谷遺跡（22）では玉髓製搔器が採集されている。

縄文時代の遺跡は法吉遺跡（16）、春日遺跡（18）、堂形町の天倫寺前遺跡（25）などがあり、法吉遺跡の調査では縄文土器の他、石鍬やドングリの集積などが検出されている。

弥生時代中期の遺跡は浜佐田の石田遺跡（3）、西生馬の元井手遺跡（40）がある。石田遺跡では丘陵上に中期後葉の竪穴住居跡1棟、斜面に同時期の加工段2ヶ所が見つかっている。弥生後期の遺跡は法吉遺跡北方の田中谷遺跡（34）、下がり松遺跡（32）で竪穴住居跡、掘立柱建物跡、加工段などが調査され、集落が営まれたことがわかっている。

続く古墳時代には多くの古墳や横穴墓が造られた。古墳は北山から派生する丘陵に多く分布する。礫郭を持つかいつき山古墳群（38）、内行花文鏡や玉類を持つ石田遺跡の石田古墳は前期末の築造になると思われる。箱式石棺や礫床を伴う木棺、盤龍鏡等を出した月廻古墳群（10）、礫床を伴う箱式石棺を主体部にもつものを含む折廻古墳群（26）は前期から中期頃のものである。塚山古墳（31）は一辺33mの造りだし付き方墳で青銅鏡、玉類、鉄製武器、武具などを副葬品に持ち、法吉地域周辺を拠点とした首長墓として畿内政権とのつながりも指摘されている中期古墳である。後期古墳では6世紀前半に造られた造りだし付き方墳の伝宇牟加比売命御陵古墳（29）、6世紀後半に造られた横穴式石室を持つ岡田薬師古墳（27）が調査されている。6世紀後半以降には水酌崎横穴墓群（8）、ひやくだ横穴墓（9）、比津ヶ崎横穴墓（17）、ゴルフ場内横穴墓群（7）、小池谷横穴墓群（5）、殿山横穴墓群（4）などの横穴墓が数多く造られる。久傳遺跡に最も近い所にあるのは全長16mの前方後方墳の比津小丸山古墳（2）である。未調査のため残念ながら時期は不明である。古墳時代の集落の様相についてはまだ余り良くわかっていない。東生馬遺跡（37）など山裾の散布地から須恵器が採集されている程度である。

奈良・平安時代の遺跡は久米遺跡（11）、久米A遺跡（12）、久米B遺跡（13）、田中谷遺跡、下がり松遺跡、向遺跡（22）など集落遺跡の調査例が多くある。久米各遺跡は3方を丘陵に囲まれた谷の南向き斜面や東向き斜面に集落が点在することが立地の特徴としてあげられている。



- | | | | |
|--------------|---------------|---------------|--------------|
| 1. 久傳遺跡 | 11. 久米遺跡 | 21. 舍人遺跡 | 31. 塚山古墳 |
| 2. 北津小丸山古墳 | 12. 久米A遺跡 | 22. 向遺跡 | 32. 下がり松遺跡 |
| 3. 石田遺跡 | 13. 久米B遺跡 | 23. 荒隈城跡 | 33. 角谷遺跡 |
| 4. 殿山横穴墓群 | 14. 久米古墳群 | 24. 同上小太郎地区 | 34. 田中谷遺跡 |
| 5. 小池谷横穴墓群 | 15. 唐梅古墳群 | 25. 天倫寺前遺跡 | 35. 田中谷古墳 |
| 6. ゴルフ場内古墳群 | 16. 法吉遺跡 | 26. 折廻古墳群 | 36. 大門遺跡 |
| 7. ゴルフ場内横穴墓群 | 17. 比津ヶ崎横穴墓 | 27. 岡田薬師古墳 | 37. 東生馬遺跡 |
| 8. 水酌崎横穴墓群 | 18. 春日遺跡 | 28. 白鹿谷遺跡 | 38. かいつき山古墳群 |
| 9. ひやくだ横穴墓 | 19. 法吉小裏山横穴墓群 | 29. 宇牟加比壳御陵古墳 | 39. 半田池条里制遺跡 |
| 10. 月廻古墳群 | 20. 摩利支天横穴墓群 | 30. 新宮古墳 | 40. 元井手遺跡 |

第3図 周辺の遺跡 (1/25,000)

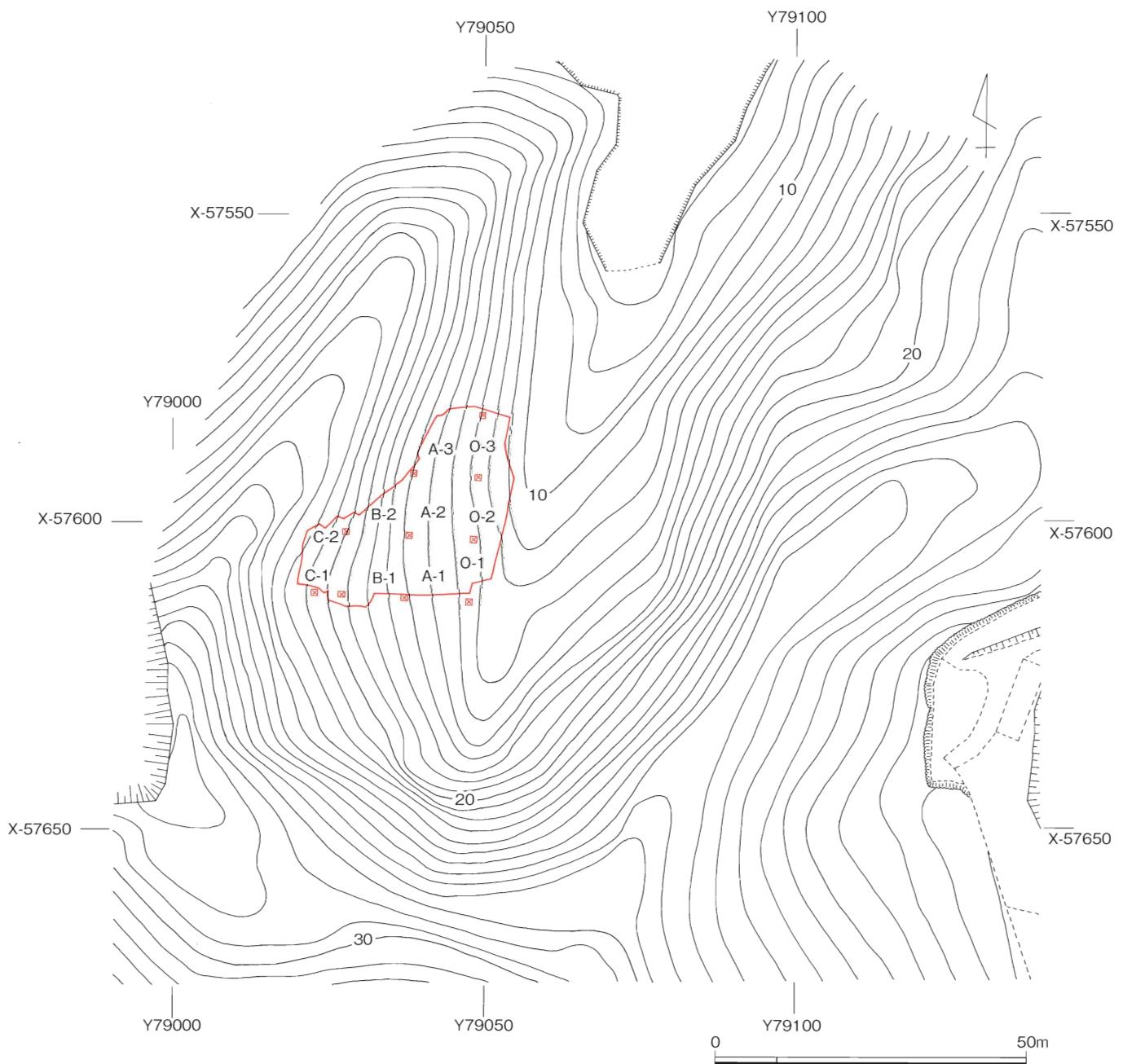


第4図 久傳遺跡位置図 (1/2,500)

III 調査の概要

1. 調査区の設定と調査の経過

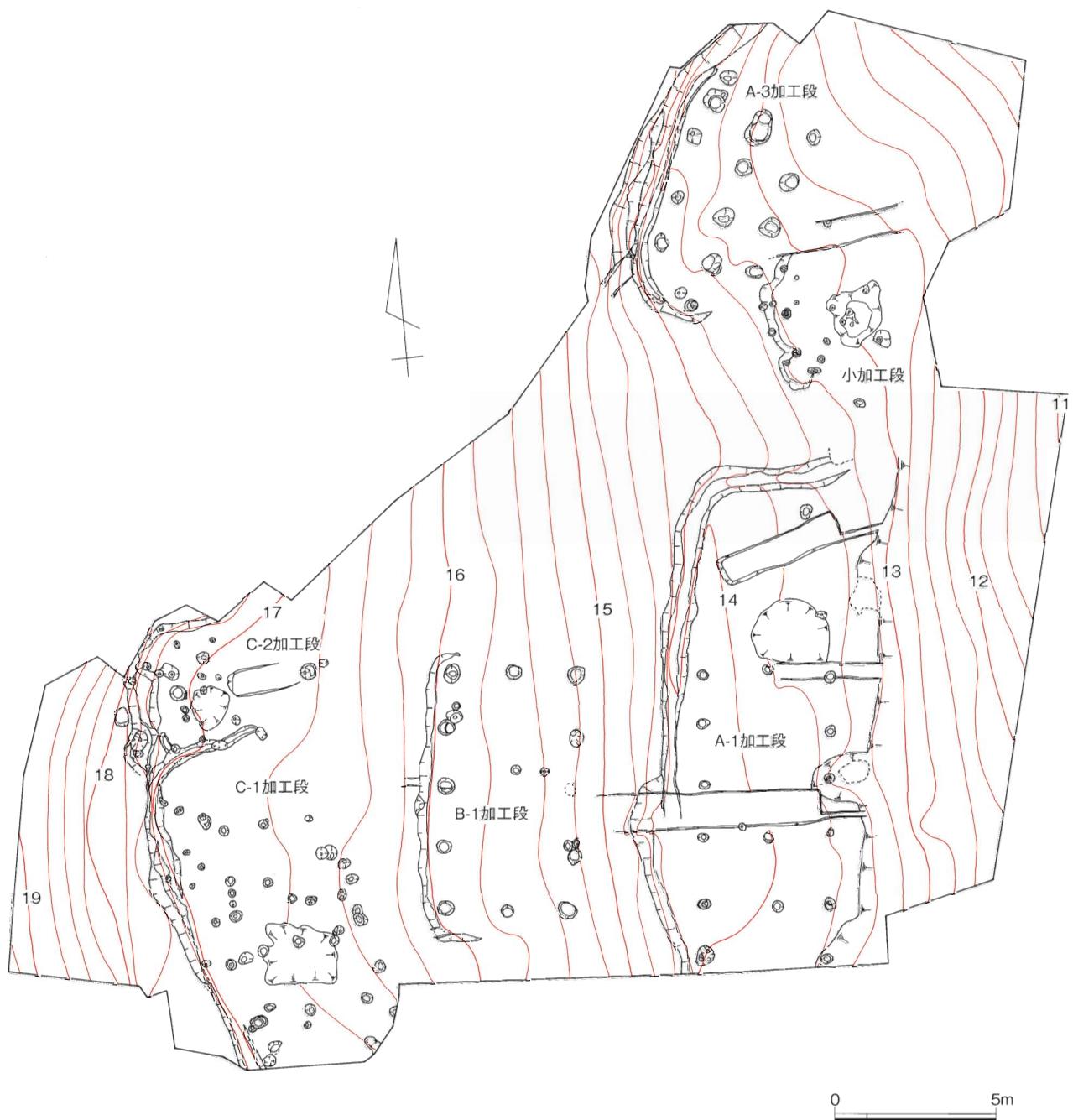
調査区には、表土の下に第2層の明褐色土～淡黄褐色土が約20cmの厚みで堆積していたが、試掘調査から無遺物層であることが確認されていたため、重機により表土と第2層を除去し、3層目に10m方眼のグリッドを地形を考慮して任意に設定し、それを国土座標に取り付けて調査を行った。



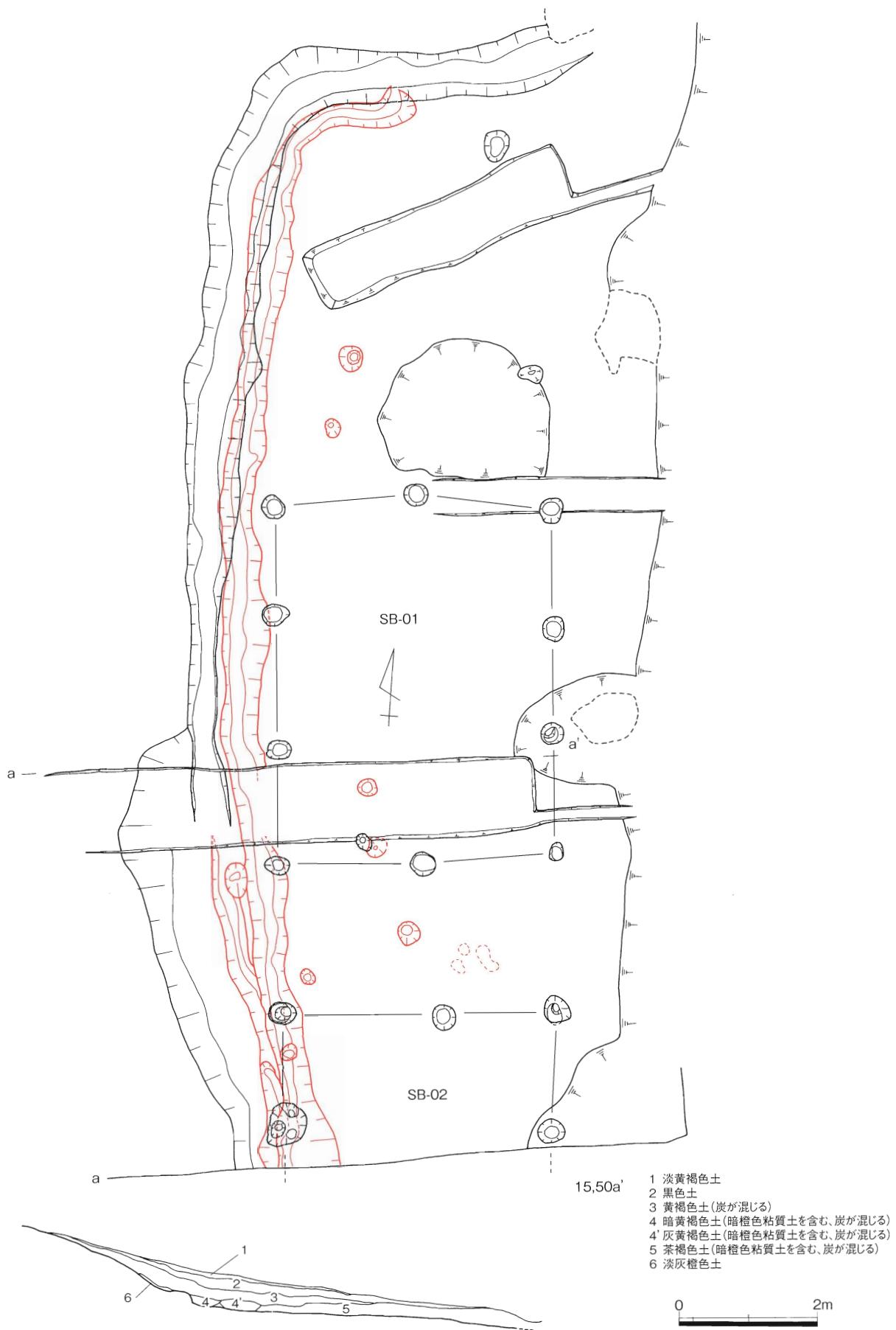
第5図 久傳遺跡調査前測量図

調査の結果、当初から緩傾斜の目立っていた箇所に第3層（暗～黒褐色土）の堆積が顕著であり、須恵器、土師器などの遺物を包含していたため土層観察用の畦を残して掘り下げたところ、6箇所から加工段が見つかり、そのうち5箇所の加工段から掘立柱建物跡を検出した。

建物跡の総数は少なくとも7棟あり、そのうち6棟は6世紀末のもの、1棟は9世紀後半頃のものと考えられる。遺物はそれぞれの加工段及び遺物包含層から須恵器、土師器などの土器類を中心にコントナ約20箱分が出土した。



第6図 久傳遺跡調査成果図

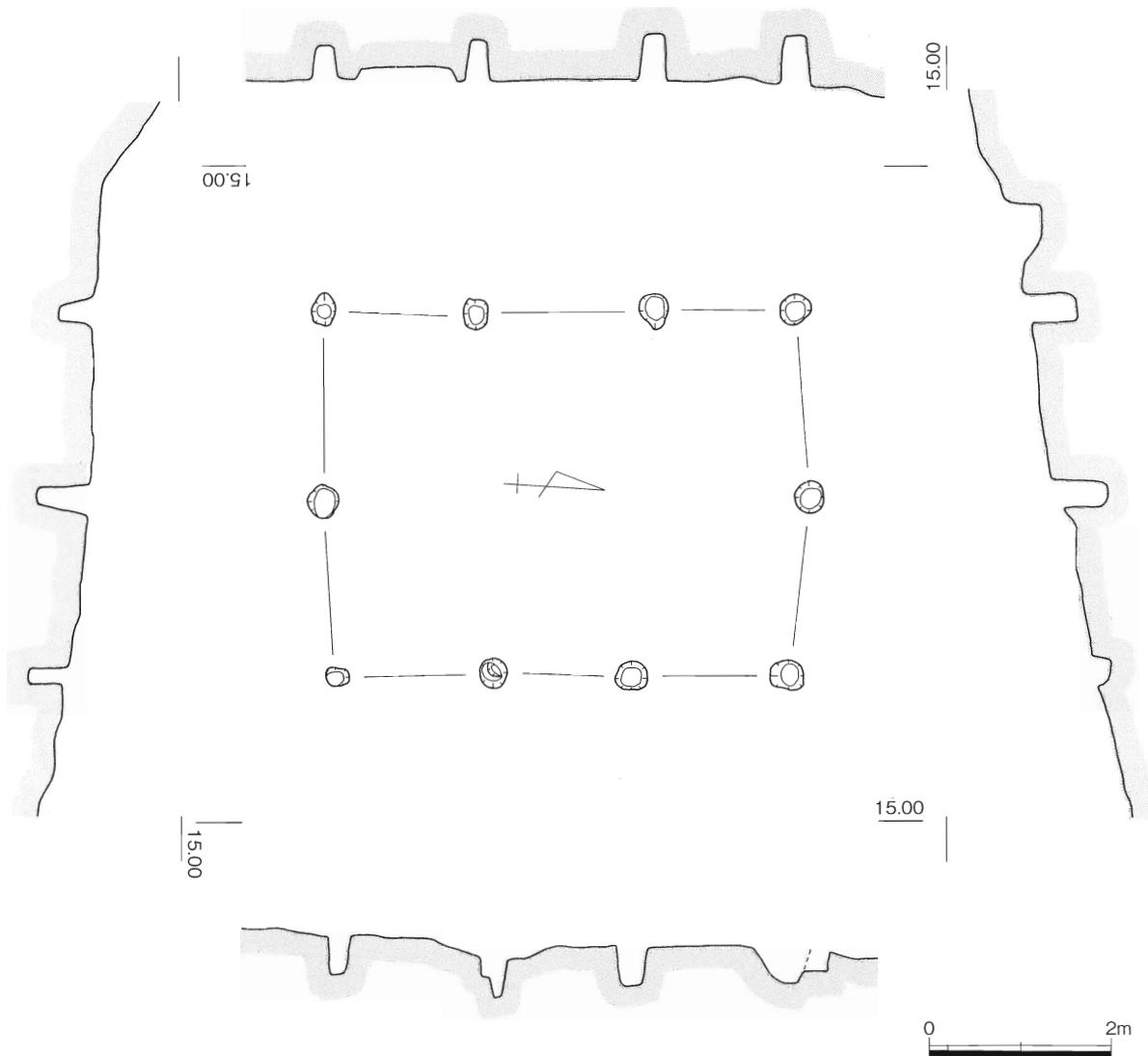


2. 検出した遺構と遺物

(1) A-1 加工段

位置・形状 最も谷奥に位置し谷底に近い加工段である。緩斜面を平面コの字状、断面L字状に掘り込んで平坦面を造り出し、壁の直下に排水溝を設けている。

土層堆積状況 加工段部分の1層目は黒色土で10~20cmの厚みがある。この上面の加工段中央より北寄りでいびつな円形の土壙を検出したが、埋土が黒色土をベースに上層の褐色土や下層の黄褐色土の混じった搅乱土であったため、新しい時期の掘り込みと判断した。1層目の黒色土からは古墳時代後期の須恵器、土師器のほか平安時代の須恵器類（壺、甕）も出土した。平安時代の須恵器片は加工段の東下方斜面からも出土し、加工段の2層目（炭を含む黄褐色土）上面に平安期の遺構を推定し精査したが検出できなかった。この2層目黄褐色土中からは須恵器の蓋坏や土師器の甕片などが出土した。3層目は炭を含む暗黄褐色土で掘立柱建物跡2棟を検出した第1遺構面に伴う壁溝（SD-01）堆積土である。第12、13図の須恵器、土師器類が出土した。4層目は炭を含む灰黄褐色土でピットや焼



第8図 A-1 加工段 SB-01 実測図

土跡を検出した第2遺構面に伴う壁溝(SD-02)堆積土である。第14図の遺物が出土した。5層目の茶褐色土は炭を若干含むものの遺物を含まない土層で、第2遺構面の基盤土層である。またこの土層とSD-02堆積土により第1遺構面が構成されている。

① 第1遺構面(第7図)

加工段平坦面の南北の内法は溝のない部分も含めて15m以上あり、東西幅は約6mが残存している。加工段の壁最大高は30cmを測る。床面の標高は14.1mである。

壁体溝SD-01 加工段を掘り込んだ壁の下部にさらに掘り込まれた幅20~40cm、深さ10~20cm、断面U字状の溝で、平面的には加工段の途中から北に向かって10mほどのびた後東に曲がり約4m行ったところでなくなっている。溝底のレベルは北に向かうほど低くなり、東端から谷底に排水していたものと思われる。

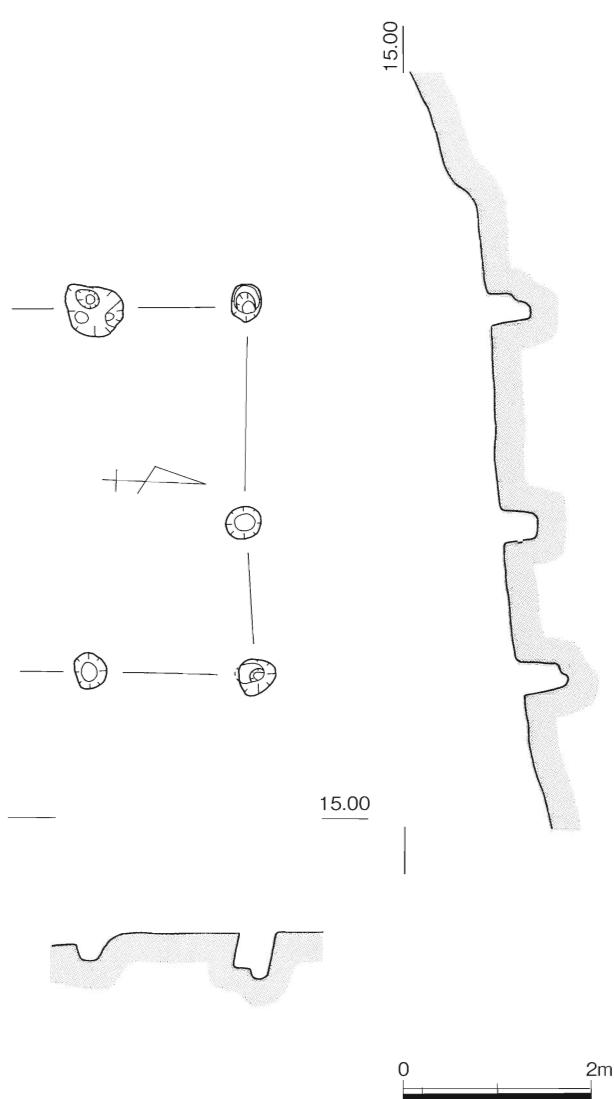
加工段平坦面の南寄りで2棟の掘立柱建物跡(SB-01、02)を検出した。2棟は1.8m離れて並存していた。北側の建物は後に述べる第2遺構面とそれに伴う壁溝上に部分的に盛土をして建てたもので、その土質からSD-01掘削時の残土を使用したことがうかがえた。SB-01の北側は空き地であったものと見られ、物置場所や作業場所などの機能を持っていたのではないかと考えられる。

掘立柱建物跡(SB-01)(第8図) 桁行3間(5m)、梁行2間(4m)の南北に長い建物跡である。柱穴は直径30cm前後、深さは山側の柱列で40~50cmを測る。

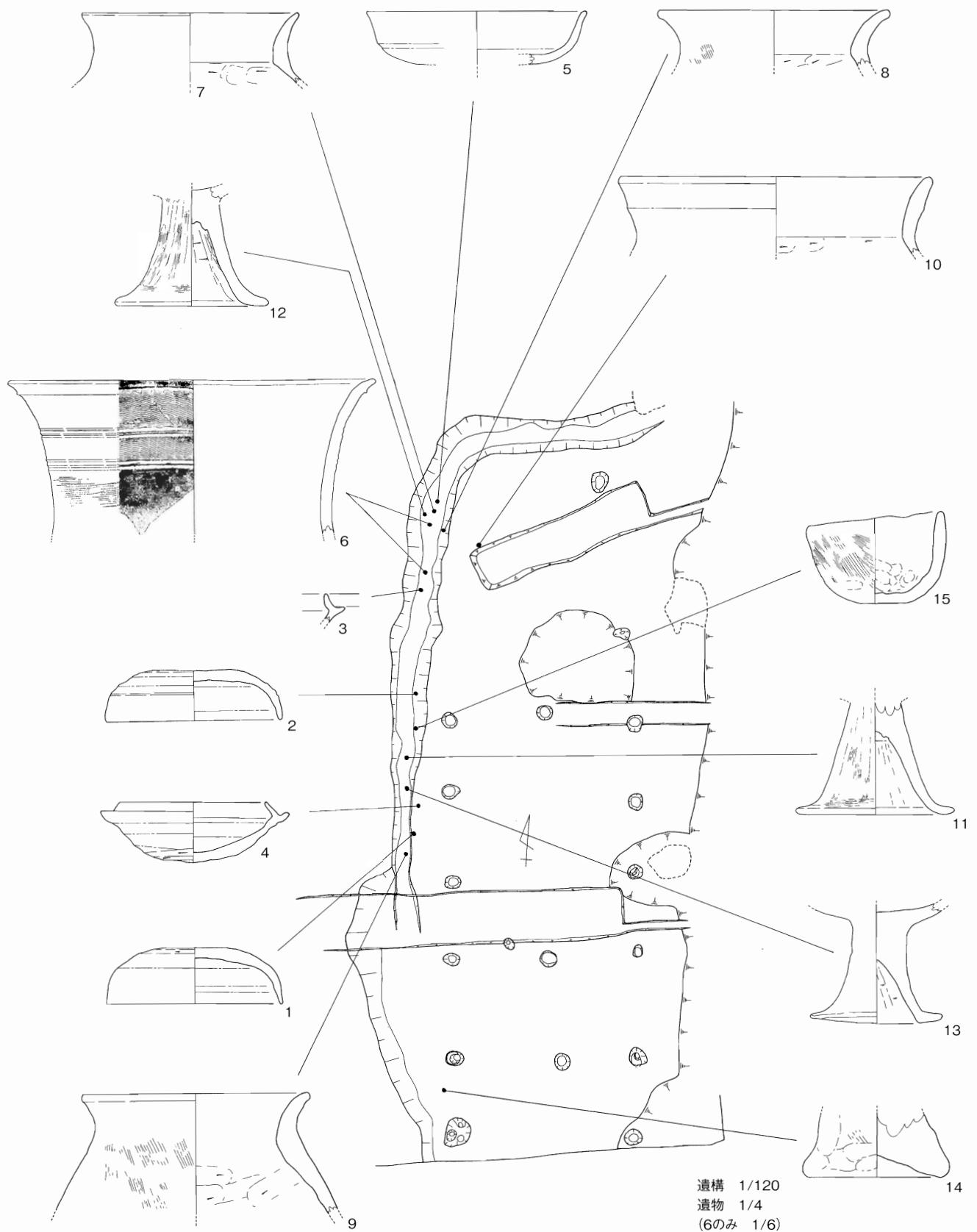
掘立柱建物跡(SB-02)(第9図) 桁行1間以上(2m以上)、梁行2間(4m)のもので南の調査区外に続いている。柱穴は直径30cm前後、深さ40cm前後を測る。

SB-01、02とも柱痕跡を残すものがあり、どちらも柱の直径は10cm程度だったことがうかがわれる。

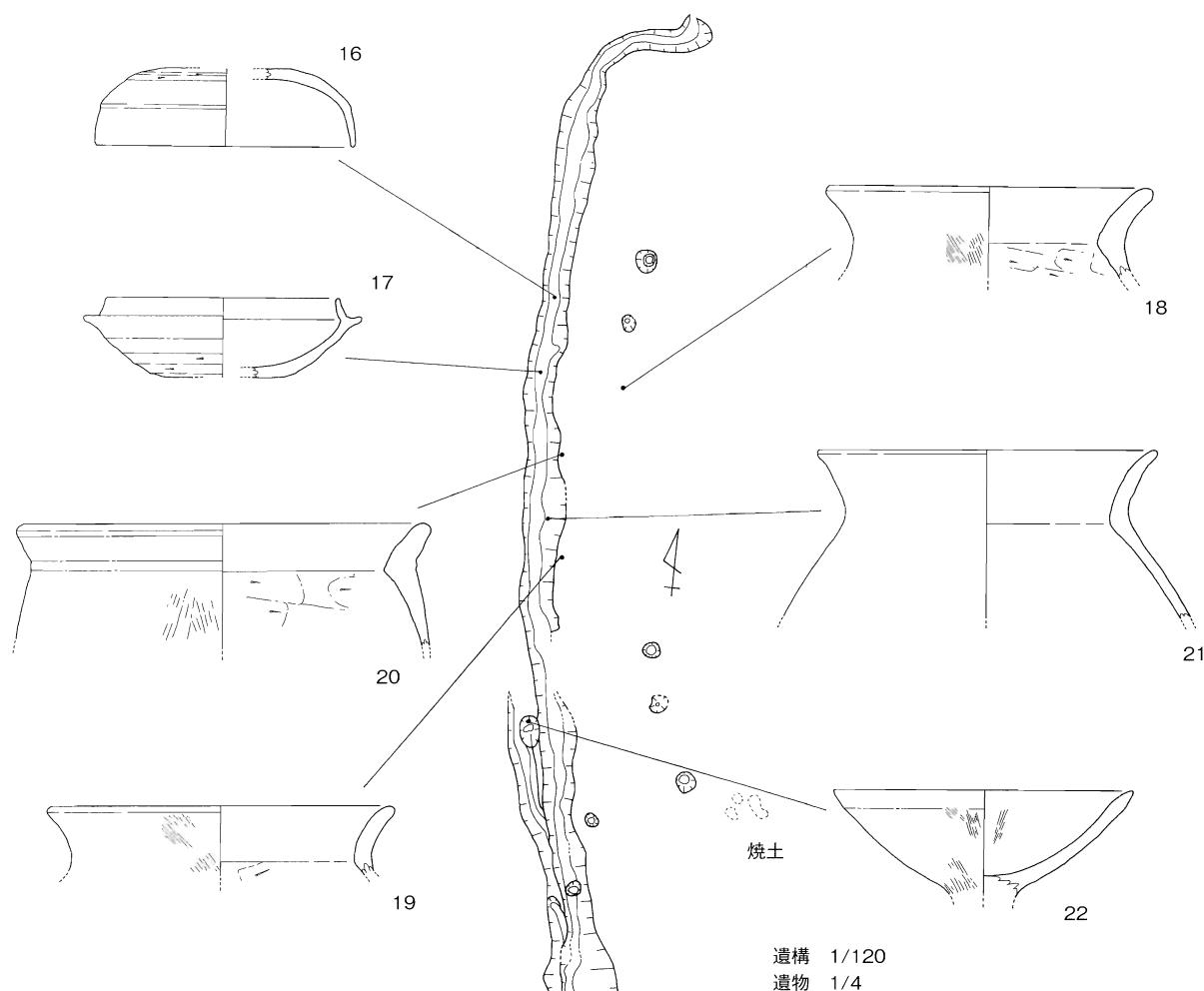
遺物出土状況 遺物は壁体溝内から多く出土し(第10図)、須恵器の蓋坏・高坏・長颈甕、土師器の甕(丹塗りを含む)・高坏(丹塗りを含む)・手捏土器などがあるが、溝底付近で見つかったものは少なく(11、13など)、溝が埋まっていく過程で入り込んだものが多い(3、7~9など)。加工段平坦面でやや浮いて出土したものもある(1、4など)。



第9図 A-1 加工段SB-02実測図



第10図 A-1 加工段第1遺構面遺物出土状況図



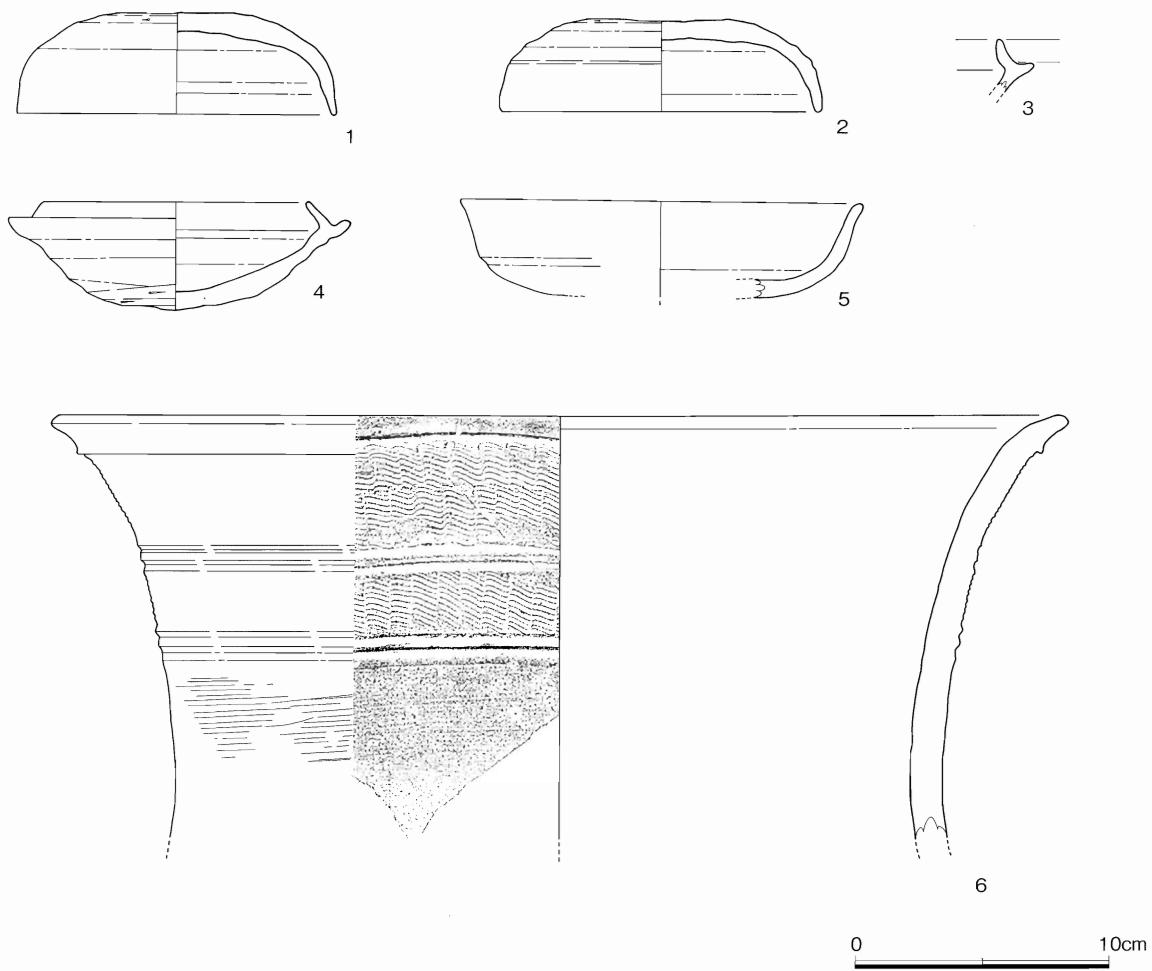
第11図 A-1 加工段第2遺構面遺物出土状況図

第1遺構面の出土遺物（第12、13図）

第12図1、2は須恵器の壺蓋である。1は肩部に稜を持たず、天井部外面の2分の1が回転ヘラケズリされるもので、口縁部内面の形状は薄手の口縁端部から1cmほど高い位置で肥厚している。2は肩部に沈線1条が廻り、天井部はヘラ切り後雑な回転ヘラケズリをするものである。3、4は須恵器の壺身である。4は口縁の立ち上がりがかなり内傾して伸び、底部中央にヘラ切り痕を残して外周を回転ヘラケズリするものである。5は須恵器の高壺壺部片、6は長頸甕口頸部片で、波状文と2条の沈線が2段に施されている。肩部以下の破片はなぜか1片も出土しなかった。

第13図7～9は土師器の甕である。口縁部はいずれも外反して伸びる。7は内外面とも丹塗りである。11～13は土師器の高壺で、いずれも外面が丹塗りである。14は土製支脚の下部、15は手捏ね土器で、外面にハケ目が残り、指頭圧痕が著しい。

第1遺構面の時期 第12図1～4の蓋壺類は大谷編年出雲4期（6世紀末）の特徴を持つものである。遺構面からやや浮いて出土してはいるが、この遺構面にほぼ近い時期を示しているものと思われる。



第12図 A-1 加工段第1遺構面出土遺物実測図（1）

② 第2遺構面（第7図）

SD-02 第1遺構面の下層で検出した溝である。SD-02は調査区の南端からSD-01の建物側の肩に沿った内側に同じ軌跡を描き、東へ折れた後2mほどでSD-01より短く終わっている。検出全長は16.5m、幅30~60cm、深さ15cm前後である。溝に囲まれた平坦面の標高は約14mで、第1遺構面との差は平坦面南部ではほとんど無く、平坦面北部で10cmほどである。SD-02に伴う建物跡などの遺構を検出するべく精査を繰り返したが、ピット数穴と焼土を検出したにとどまり、建物を想定するにはいたらなかった。

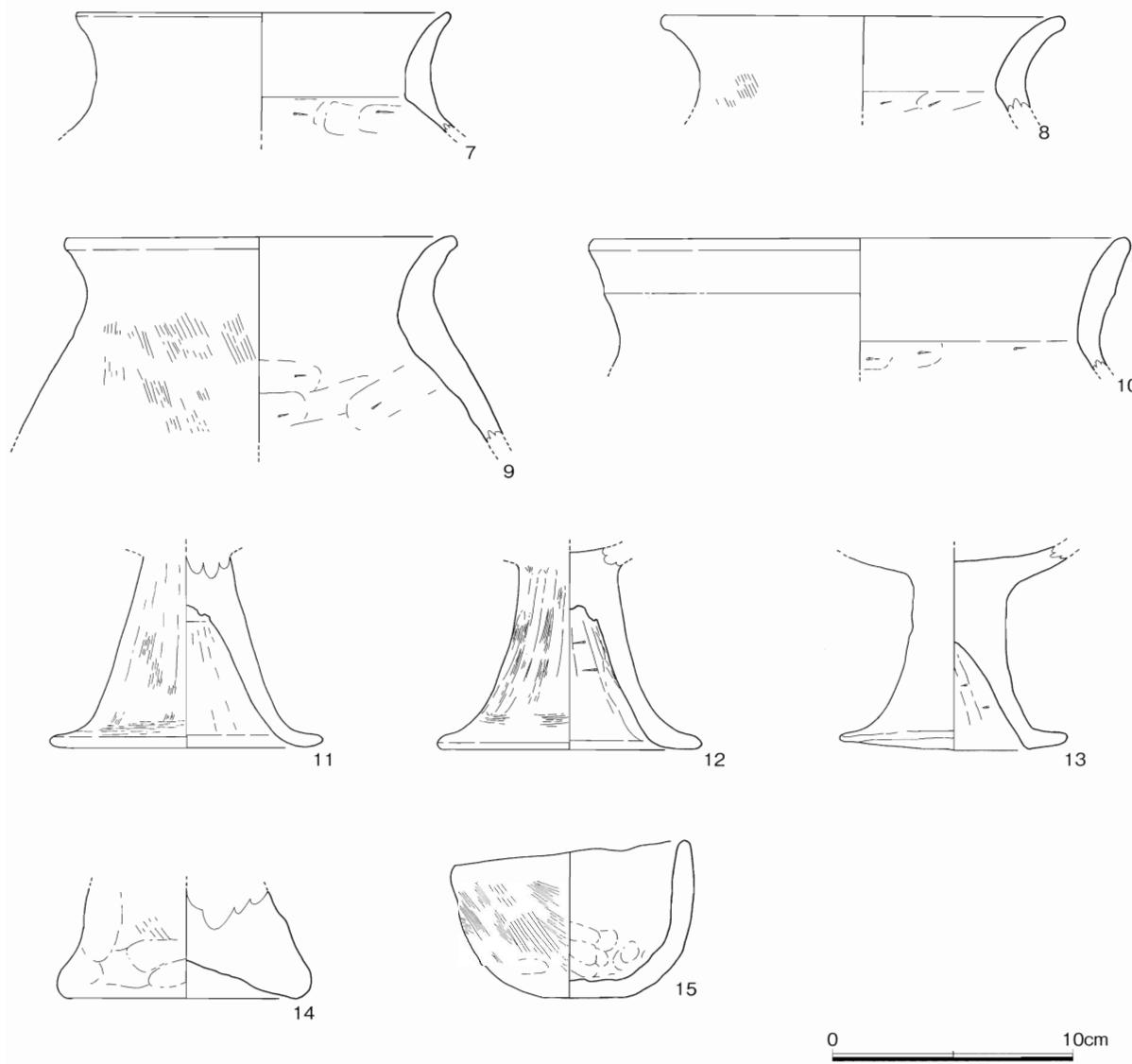
遺物出土状況 遺物はSD-02の埋土中や肩部から須恵器の蓋坏（第11図16、17）や土師器の甕（19、20）、丹塗りの土師器高坏（22）などが、平坦面上から土師器甕（18）が出土した。

第2遺構面の出土遺物（第14図） 第14図-16は須恵器の坏蓋である。肩部の稜はやや不明瞭ではあるが天井部と口縁部とを分けている。天井部2分の1に回転ヘラケズリを施す。17は坏身である。口縁部の立ち上がりは内傾気味に伸び、受部はやや上方に突出する。底部の2分の1以上に回転ヘラケズリを施す。

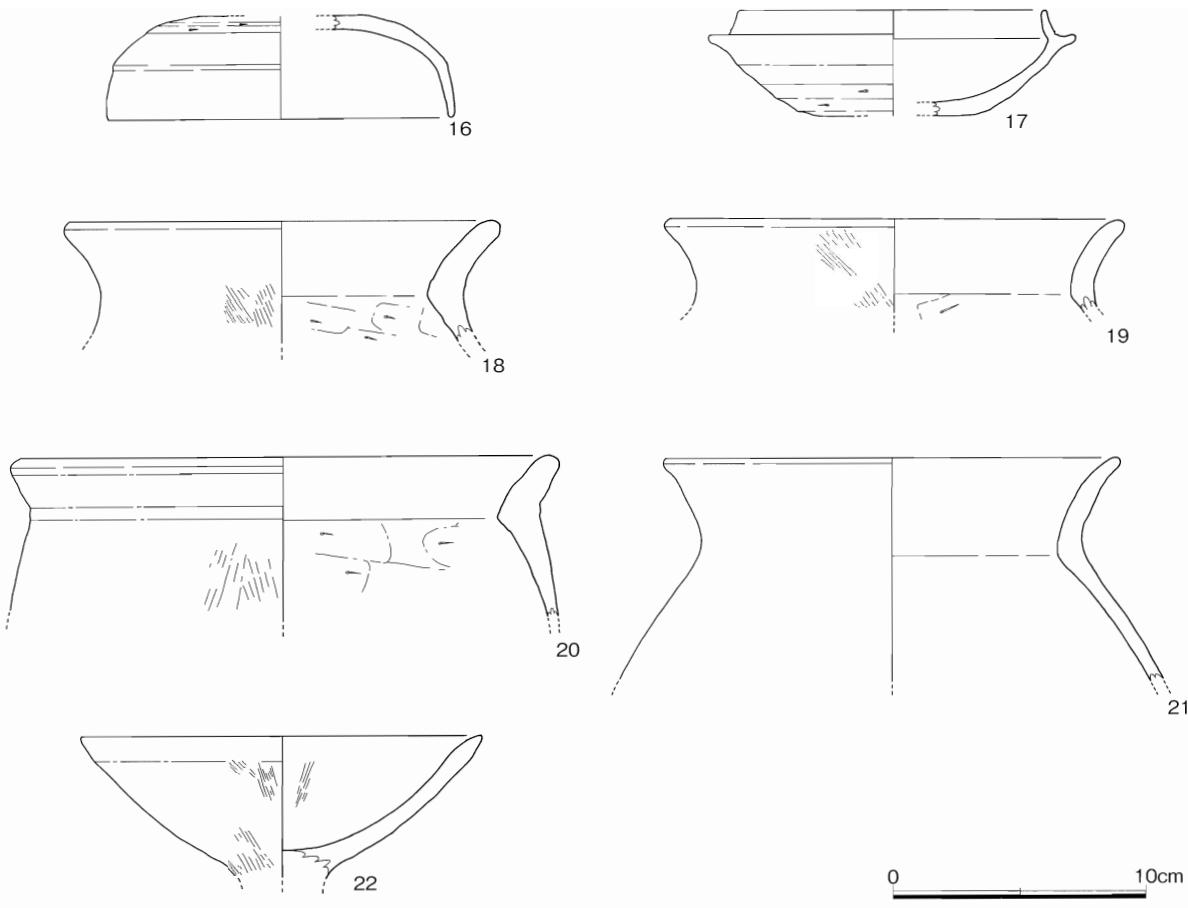
18~21は土師器の甕である。このうち18、19、21は口縁部が外反するタイプのもの、20は屈折して短く外傾するものである。22は内外面に丹塗りを施した高坏坏部片である。体部から口縁部にかけて余り丸みを持たず伸び、口縁内面の端部近くがやや肥厚し、とがり気味の端部で終わるものである。

第2遺構面の時期 第14図-16、17の須恵器蓋坏は第1遺構面と変わらず、大谷編年出雲4期の特徴を持つものと考えられる。

第2遺構面と第1遺構面の出土土器には時期差が見られないことから、短期間のうちに溝を山側へ掘りなおし、平坦面の改築をして建物を建てており、その建物も同じ出雲4期のうちに廃絶したものと考えられる。



第13図 A-1加工段第1遺構面出土遺物実測図（2）



第14図 A-1加工段第2遺構面出土遺物実測図

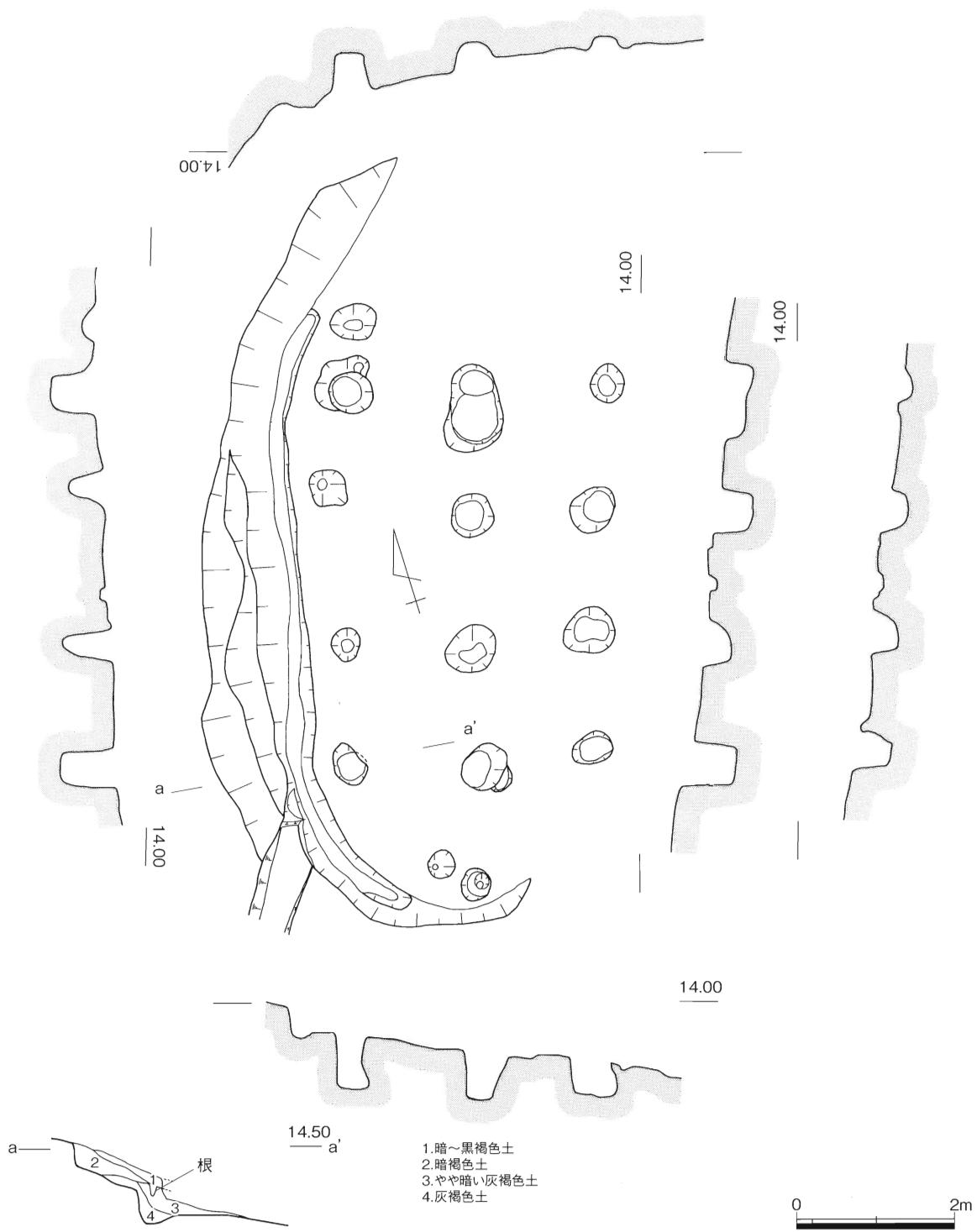
(2) A-3加工段

位置 谷部の出口に近い東向き緩斜面で検出した加工段である。

加工段の形状と土層堆積状況 加工段の形状は平面が幅広の逆U字状、断面が逆L字状に加工され、南北長は9m、東西幅5m、壁高50~70cmを測る。壁の直下には壁体溝が設けられており、幅20~40cm、深さ5~10cm、全長7.8mを測る。加工段の山側上端は黒褐色土を除去した段階で検出した。加工段内部については、壁体溝は埋まったものの遺構面上にはほとんど覆土のない時点での加工段上端から遺構面にかけて黒褐色土が堆積した状況であった。この黒褐色土下面で1棟の掘立柱建物跡を検出した。ピット検出面は緩やかではあるが傾斜があり、中央部から北東部が他の部分より低い状況であったため、床面が流出した可能性が考えられる。

遺物出土状況 遺物は須恵器高坏脚部（第16図-24）が壁体溝埋土上層で出土しており、加工段廃絶前後の時期を示すものと思われる。他に加工段灰絶後遺構面上に堆積した黒褐色土中から須恵器の坏蓋（23）、土師器の甕数個体（25、27他）、把手（30）、袋状鉄斧（31）などが出土している。

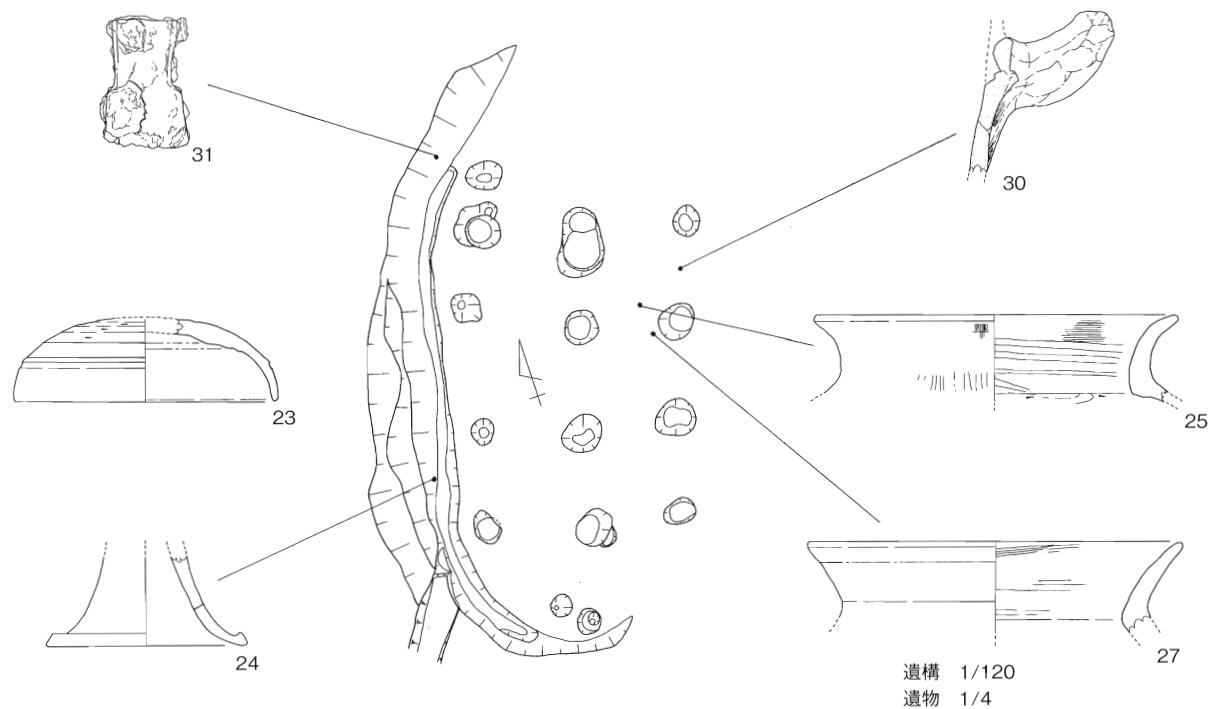
掘立柱建物跡（SB-03）（第15図） 桁行3間（4.7m）、梁行2間（3.2m）の総柱建物跡で倉庫と考えられる。柱穴の掘り方は上端で40~70cm、下端で15~40cm、山側柱列の深さ50~70cmを測る。埋土は暗褐色~黒褐色土に地山のブロックが混じるもので、柱痕跡は確認していない。



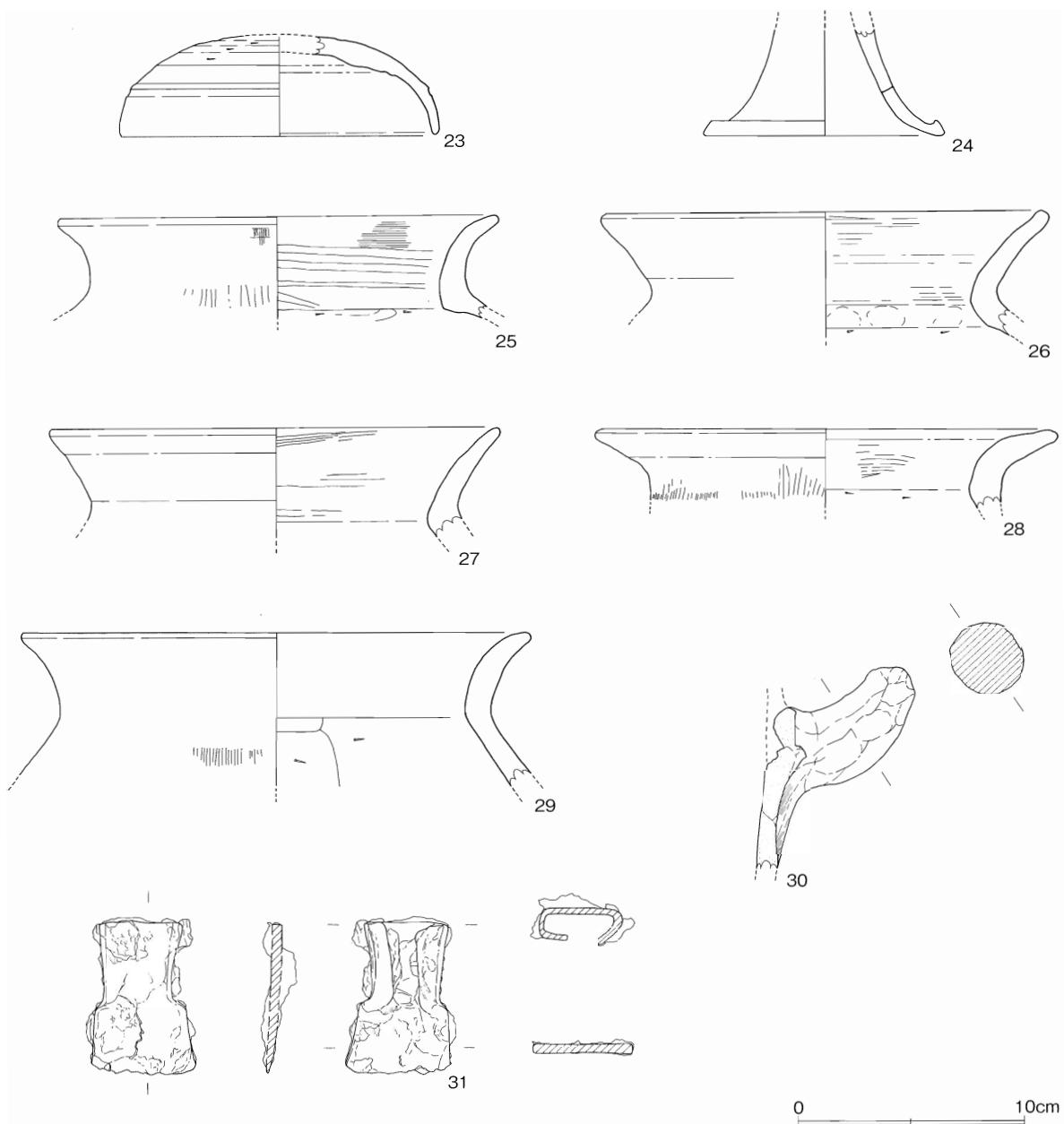
第15図 A-3加工段SB-03実測図

出土遺物 第17図-23は須恵器の壺蓋である。肩部の稜はやや不明瞭であり、上下のナデにより作り出されている。天井部は約3分の2に回転ヘラケズリが施される。24は須恵器の高壺脚部片である。透かしの痕跡を残す。25~29は土師器の甕である。25、26のように頸部で屈曲し肩から胴部が強く張り出すもの、28のように短く外反する口縁部からずん胴になると思われるもの、27、29のようにその中間的なものなど形態が変化に富んでいる。30は甕の把手であろう。31は袋状鉄斧である。刃部幅4.6cm、全長6.8cm、最大厚1.6cmを測る。

A-3加工段の時期 第17図-24の須恵器高壺は壁体溝埋土上層の出土遺物であり、23の壺蓋はさらにそれ以降の堆積土中の出土遺物であるが、平坦面上の土層堆積状況を見ると、建物が廃絶してからさほどの時間的経過はないものと考えられるため、これらの遺物が一定の目安になるものと考えた。23の壺蓋は大谷編年4期に相当するもので、この総柱建物はその頃には廃絶していたと考えられよう。



第16図 A-3加工段遺物出土状況図



第17図 A-3加工段出土遺物実測図

(3) B-1 加工段

位置・形状・規模 A-1 加工段西の山側に隣接して見つかった加工段である。緩斜面を平面形コの字状、断面形L字状に整形して平坦面を造りだし、その内部に掘立柱建物を建てている。加工段の規模は南北長9m、東西幅5mあり、壁高は最大で30cmを測る。加工段床面の標高は15.8mである。壁体溝は検出していない。

土層堆積状況 加工段上に堆積した土層は暗～黒褐色土1層だけであった。この土層は西壁側では約30cmの厚みがあるが東側ではごく薄いものであった。この土層を掘り下げるとき、加工段西側の上端から2m位の範囲は当初の床面が残っていたが、それより東側は橙黄褐色の地山面が東に向かって傾斜しており、貼床をしていたとすればそれが流失した可能性も考えられる。

掘立柱建物跡 (SB-04) (第18図) 建物跡の規模は桁行4間(7.3m)、梁行2間(3.8m)である。加工段いっぱいに建てられた南北に長い建物跡であるが、東側柱列のうち3本目が検出できなかった。他のピットより浅かったため残らなかったのか、建物の構造上、柱がなかったのかは不明である。柱穴の大きさは40～50cm、深さは山側で70cm、谷側で10～30cmを測る。柱痕の残る柱穴もあり、その土層断面から見ると柱の直径は15cm前後と推定される。

建物を構成する主要な柱跡と思われるP-1～P11のほかに床面で検出したピットが3穴あり、P-12、13はP-4の傍で、P-14は建物跡中央よりやや北寄りで見つかっている。

建物跡内に炭や焼土跡はなかった。

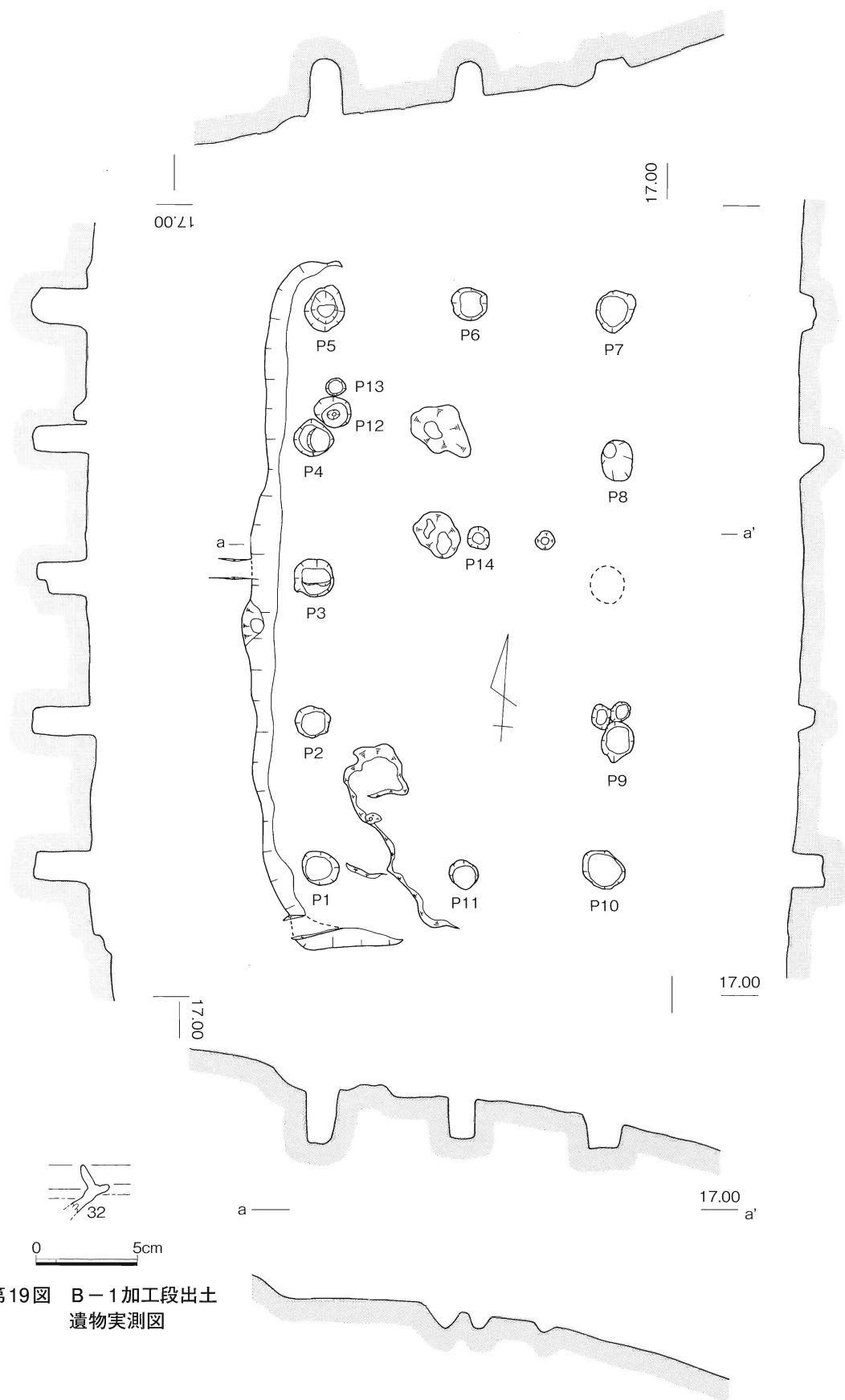
遺物出土状況と出土遺物 加工段の輪郭を検出してから後に出土した遺物は非常に少なく、埋土中と床面から土師器小片が数片、須恵器坏身小片(第19図)がP-12の埋土上層から出土したのみである。この坏身片は口縁部の立ち上がりが比較的高く内傾し、受け部が外上方に伸びるもので出雲4期に相当すると考えられる。

SB-04の時期 須恵器の坏身片が出土したP-12は建物跡の柱穴と同じ床面から検出したピットであり、建物と同時期ないしはそれ以前のものと判断されるが、この加工段においても、より谷側の遺物包含層においても出雲5期以降平安時代以前の遺物は出土していないことから、この建物の時期はやはり出雲4期の6世紀末頃としておいて大過なかろうと思う。

(4) C-1 加工段

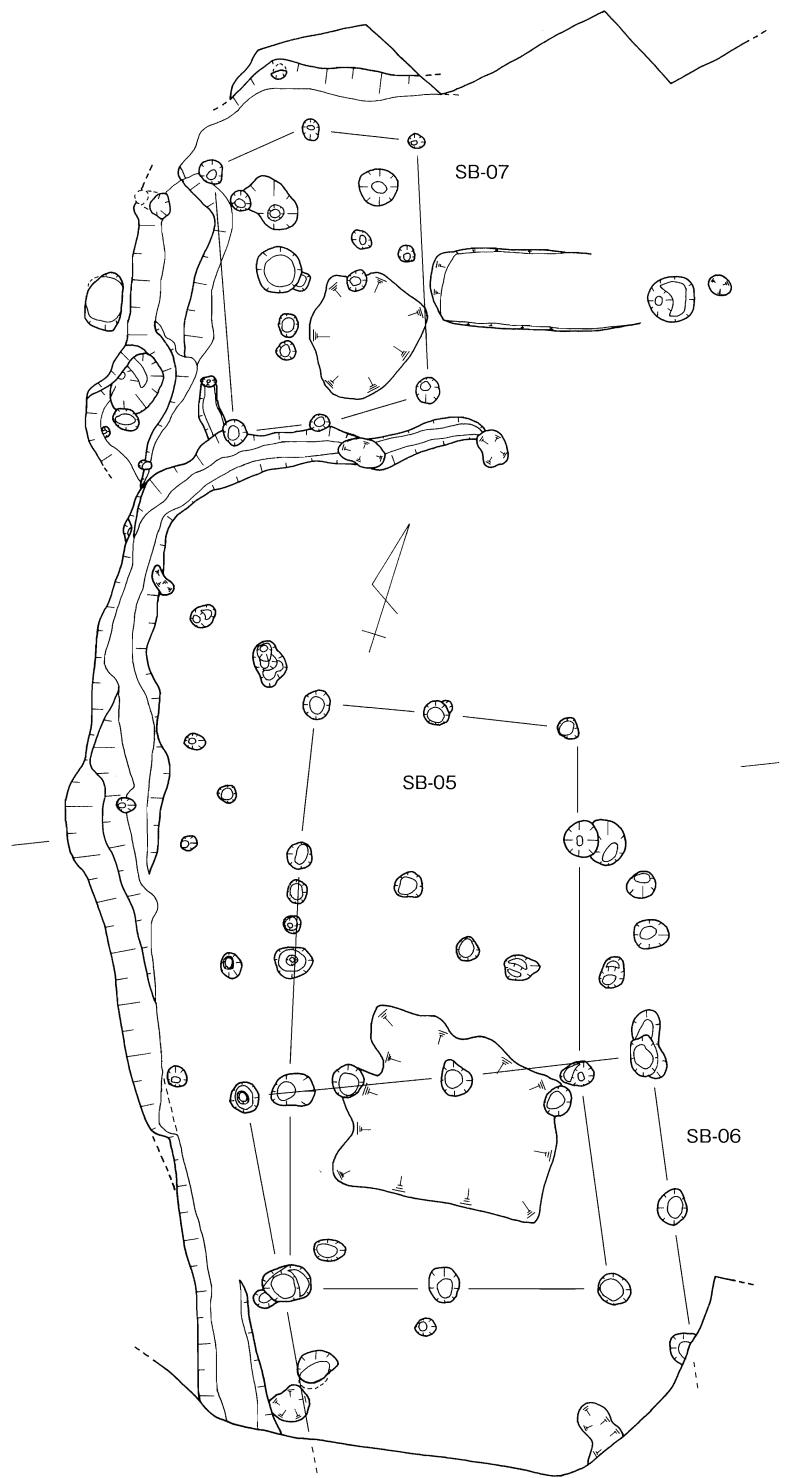
位置・形状・規模 B-1 加工段西の山側に隣接する加工段で、最も標高の高い位置にある。加工段の南側部分は調査区外となり、全容は明らかにできなかったが、断面L字状に加工された平坦面が続いている状況であった。加工段の内法は南北長10m以上、東西幅は5.5mを測る。壁体の直下には溝が廻り、加工段の北側上端はC-2加工段によって床面と同レベル近くまで削平を受け、溝だけが残っていた。加工段床面の標高は16.9mである。加工段床面には多数のピットが見つかり、2棟の建物跡を想定した。一部は重複しており、建替えがあったものと思われる。北側の建物と北側へ廻った溝との間には若干の空き地がある。

土層の堆積と遺物出土状況 加工段の上層は暗～黒色土で覆われていたが、中に塊状の炭をまじえた一段と黒い部分が数ヶ所あり、加工段埋没後に焚火をした後それを押し広げたような形跡があった。古墳時代後期の遺物のほかに平安時代の須恵器を含んでおり、土製の紡錘車や製塩土器片も出土している(第28図)。この焚火と出土遺物は後に述べるC-2加工段に関連するものとして注目される。



第19図 B-1加工段出土
遺物実測図

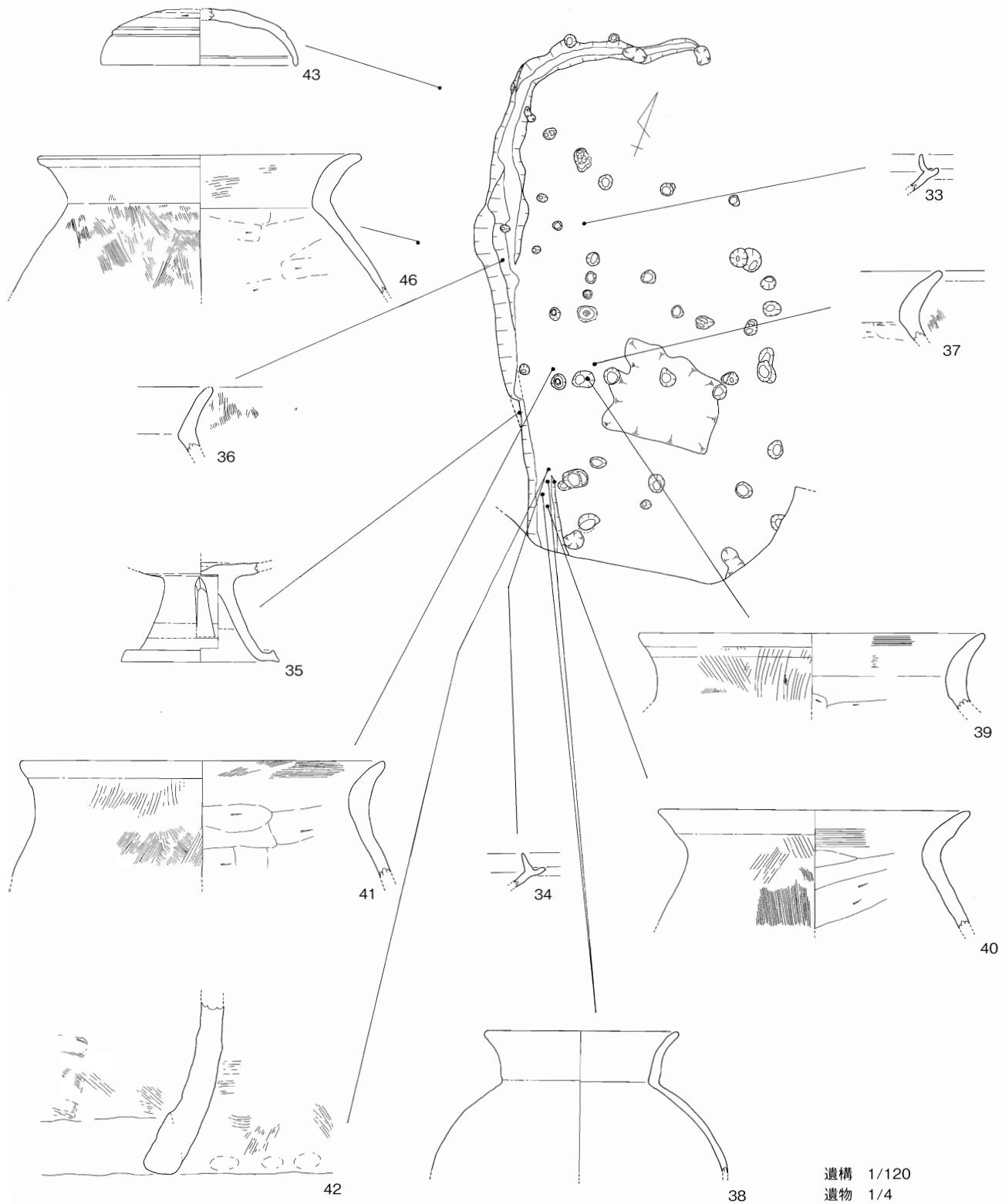
第18図 B-1加工段SB-04実測図



- 1. 黒色土(焼土含)
- 2. 暗灰褐色土
- 3. やや暗い灰褐色土(I)
- 4. 灰褐色土(I)
- 5. やや暗い灰褐色土(II)
- 6. 灰褐色土(II)
- 7. 淡灰褐色土(I)
- 8. 濃灰褐色土
- 9. 淡黄褐色土
- 10. 暗黄褐色土

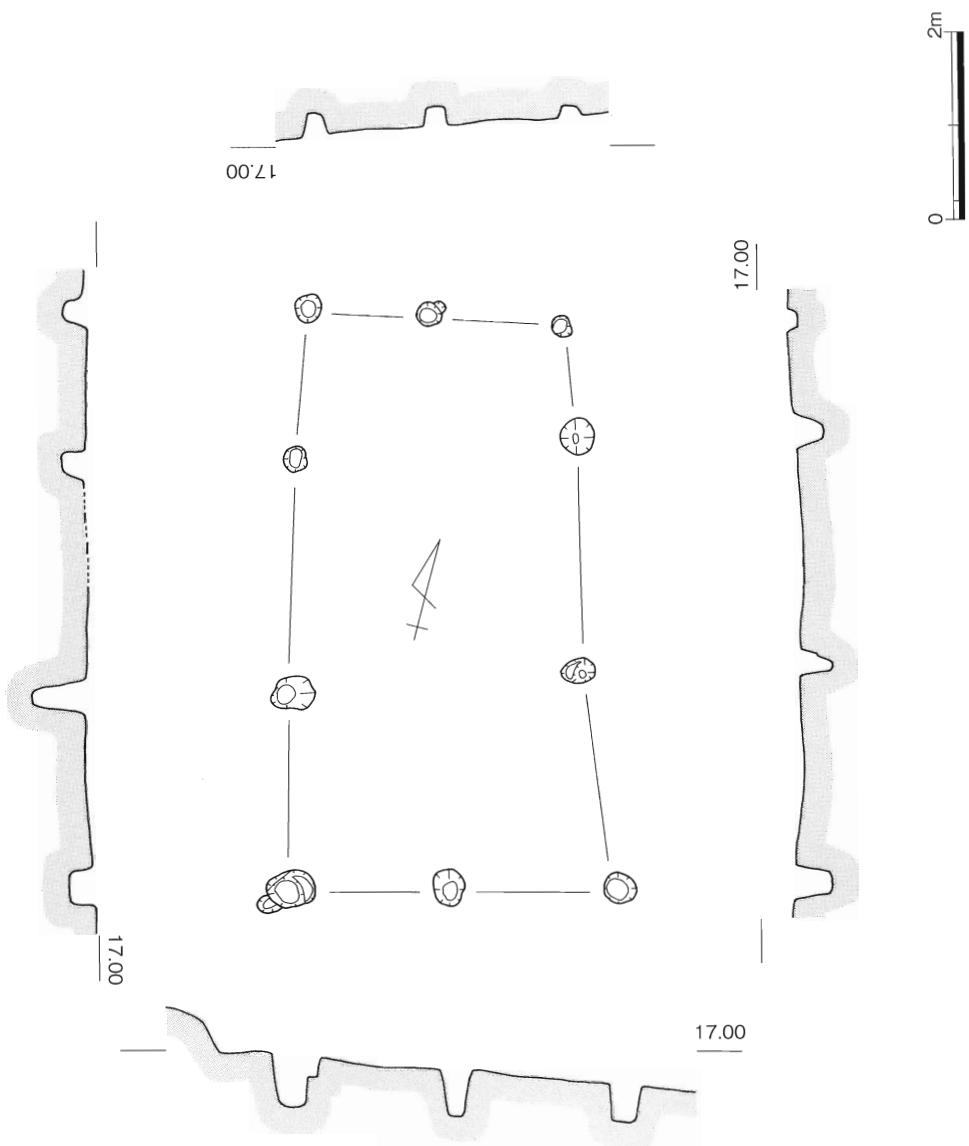
0 2m

第20図 C区加工段全体図

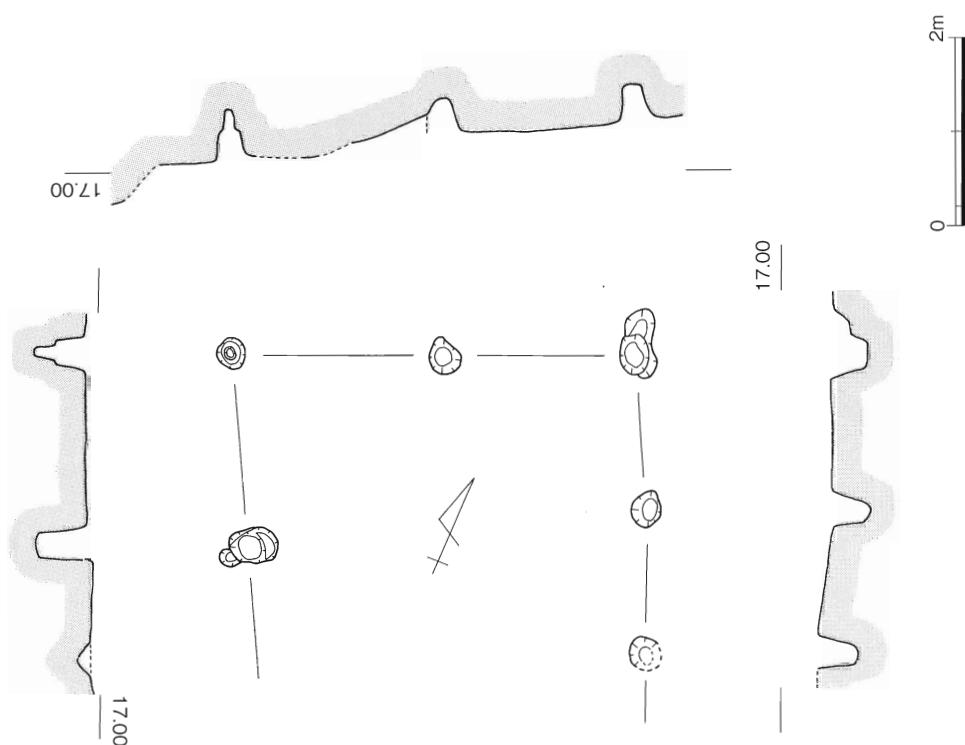


第21図 C-1 加工段遺物出土状況図

第22図 C-1加工段SB-05実測図



第23図 C-1加工段SB-06実測図

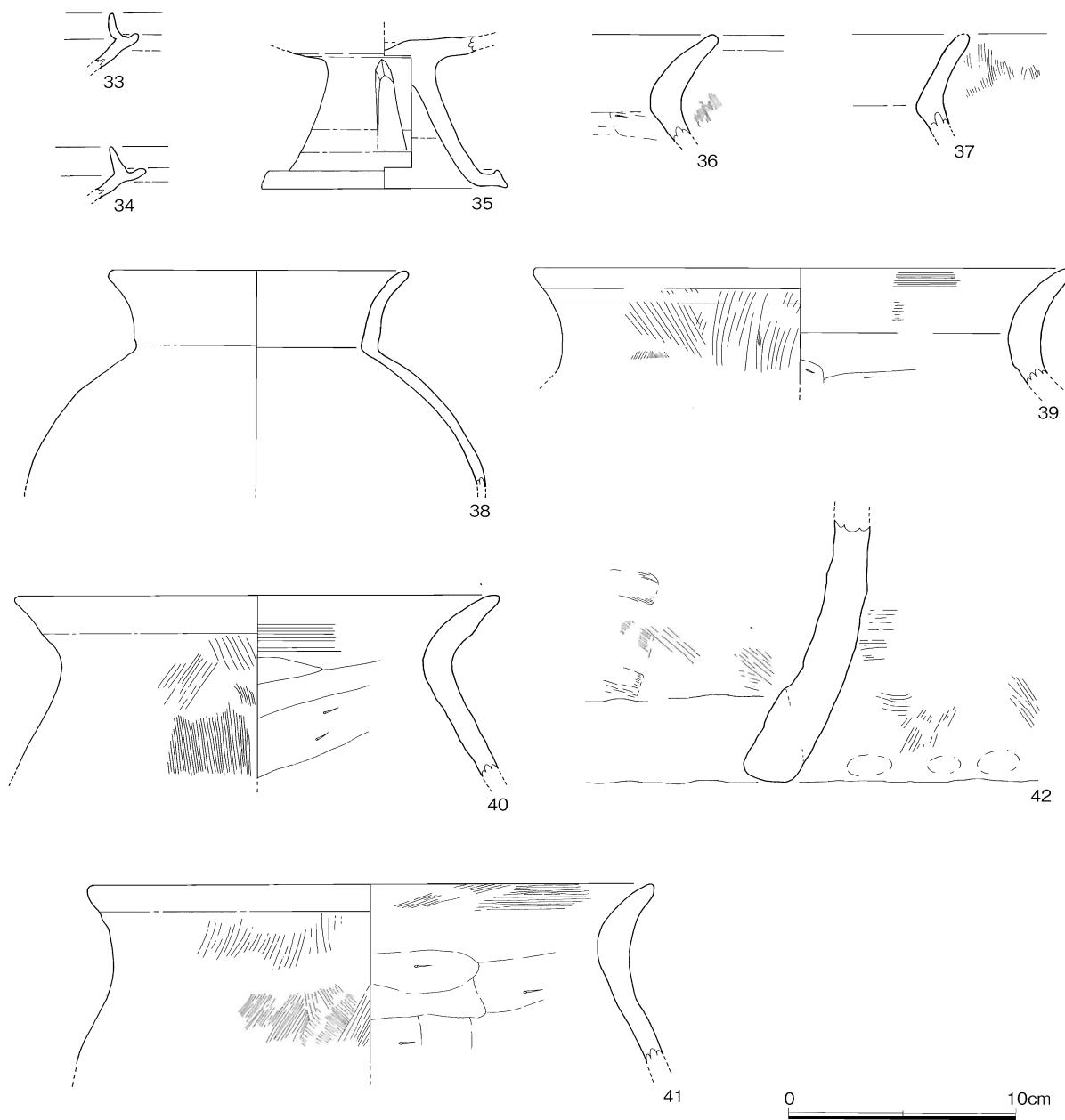


黒褐色土の下には暗灰褐色土、灰褐色土、黄灰色土が堆積しており、須恵器の蓋壺、高壺、土師器の甕、竈片など土器類の破片が出土した。遺構面直上の遺物は第21図-33の須恵器壺身片、38の土師器甕などである。

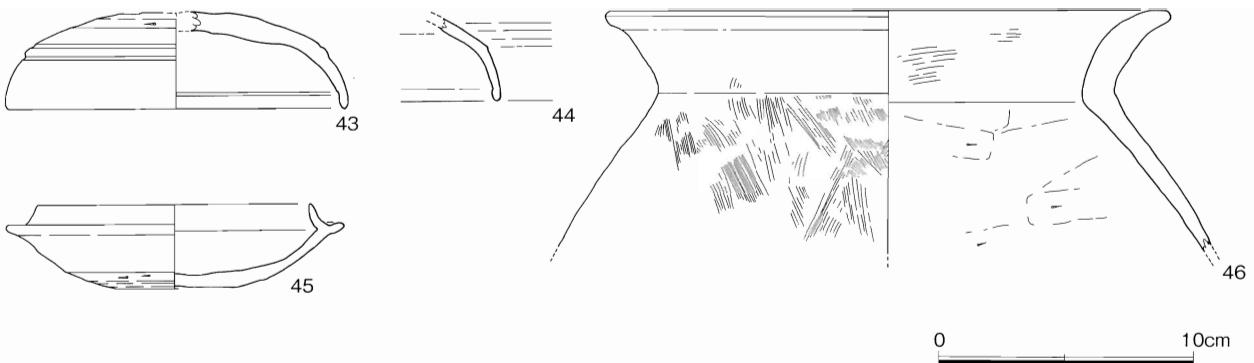
加工段の西側は緩傾斜面が1~2m幅あり、それより上部は急傾斜に変わるが、この傾斜面からも43の壺蓋や46の土師器の甕片が出土している。

掘立柱建物跡 (SB-05) (第22図) 柱行3間 (東側5.9m、西側6.1m)、梁行2間 (北側2.7m、南側3.3m) のかなり変形した南北に長い掘立柱建物跡である。柱穴の規模は上端径25~40cm、深さは山側柱列で30~50cmを測る。

掘立柱建物跡 (SB-06) (第23図) 柱行2間以上 (3.6m以上)、梁行2間 (4.3m) の南北に長い



第24図 C-1 加工段出土遺物実測図



第25図 C-1 加工段西側出土遺物実測図

掘立柱建物になると思われる。柱穴の規模は上端で35cm前後、深さ40~50cmを測る。

出土遺物（第24、25図） 第24図-33、34は壊身小片である。口縁部の立ち上がりは内傾して直線的に伸びるものとやや外湾気味に伸びるものである。受部は外上方に伸びる。35は須恵器高壊の脚部で長い台形状の透かしを持つ。36~41は土師器の甕である。口縁部は外反して伸び、胴張りの少ないものがほとんどであるが、38だけは頸部の屈曲が明瞭で胴部が張り出し、器壁が他のものに比べて薄い特徴がある。42は竈の基底部片である。

第25図43、44は須恵器の壊蓋である。43の肩部は2条の沈線によって作り出され、44の肩部は鈍い稜をなして口縁部と天井部を分けている。いずれも口縁部内面に浅い沈線をめぐらす。45は須恵器の壊身である。口縁部の立ち上がりは比較的高く内傾して伸び、底部は回転ヘラケズリが施され平坦気味である。46は土師器の甕である。

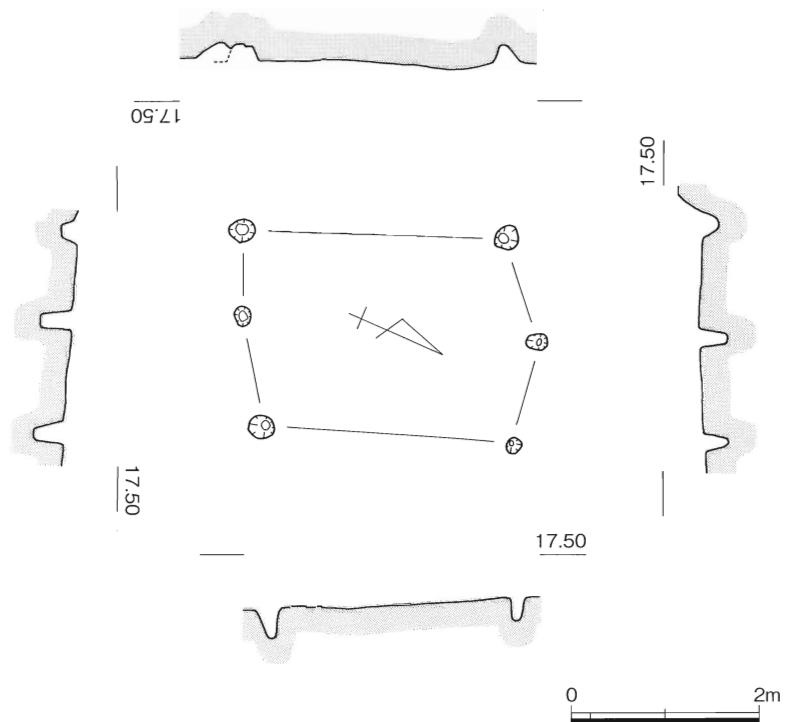
C-1加工段の時期 加工段から出土した須恵器の蓋壊類は大谷編年4期の特徴を持っている。土師器の甕のうち38は形態的にやや古い要素を持っていると思われるが、それ以外は古墳時代後期によく見られるものであり、加工段の時期は6世紀末頃と考えられる。

(5) C-2加工段

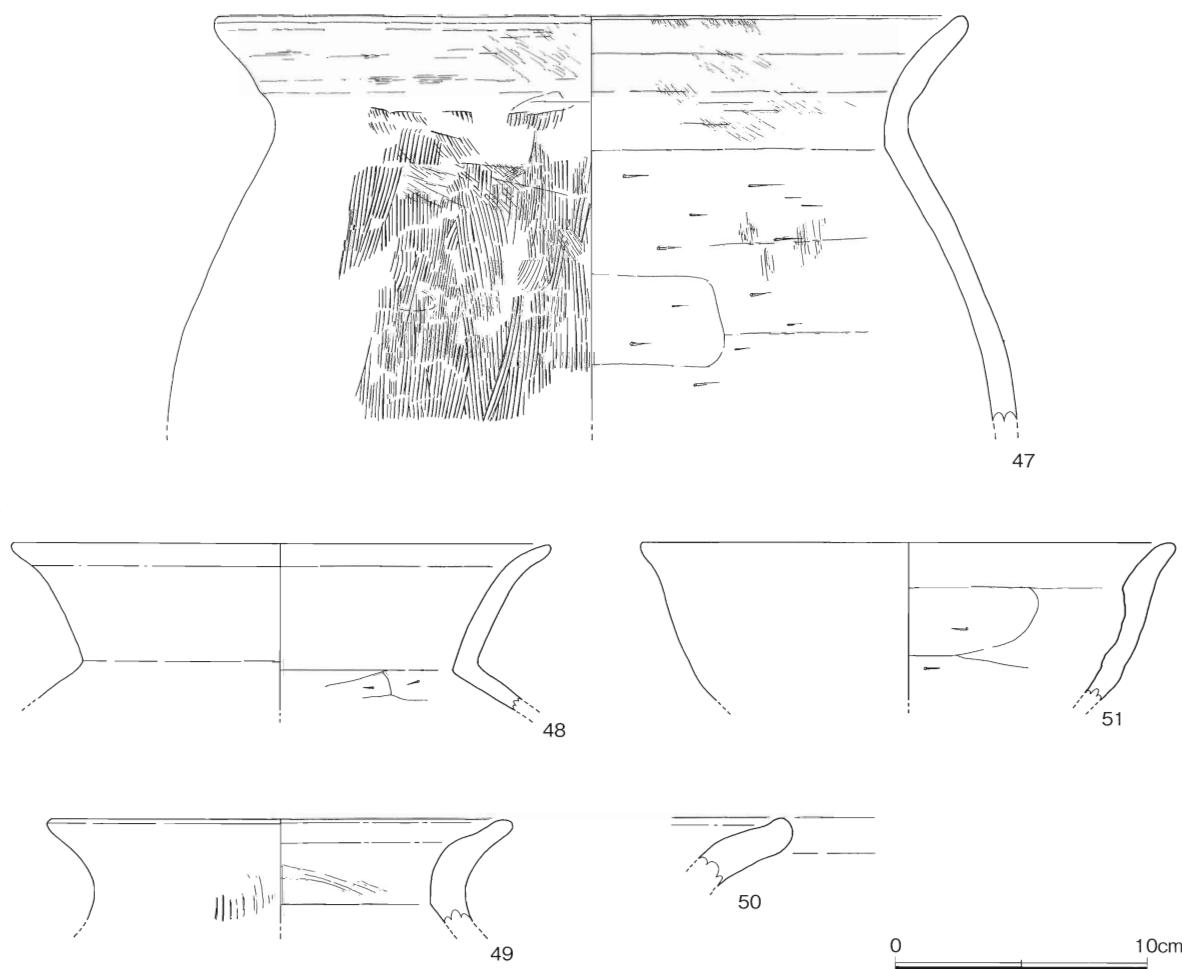
位置・形状・規模 C-1加工段の北側に隣接する。C-1加工段埋没後に造成されたもので、C-1加工段の壁体溝を切ってピットが掘り込まれていた。溝から北端までは約3m、東西幅は2.5mを測る。標高は17mである。その狭い空間に小規模な建物を想定してみた。

掘立柱建物跡(SB-07) (第26図) 1間(2.6m) × 2間(2.1m) のやや変形した小形の掘立柱建物跡である。柱穴の規模は上端で15~25cm、深さ20~35cmを測る。

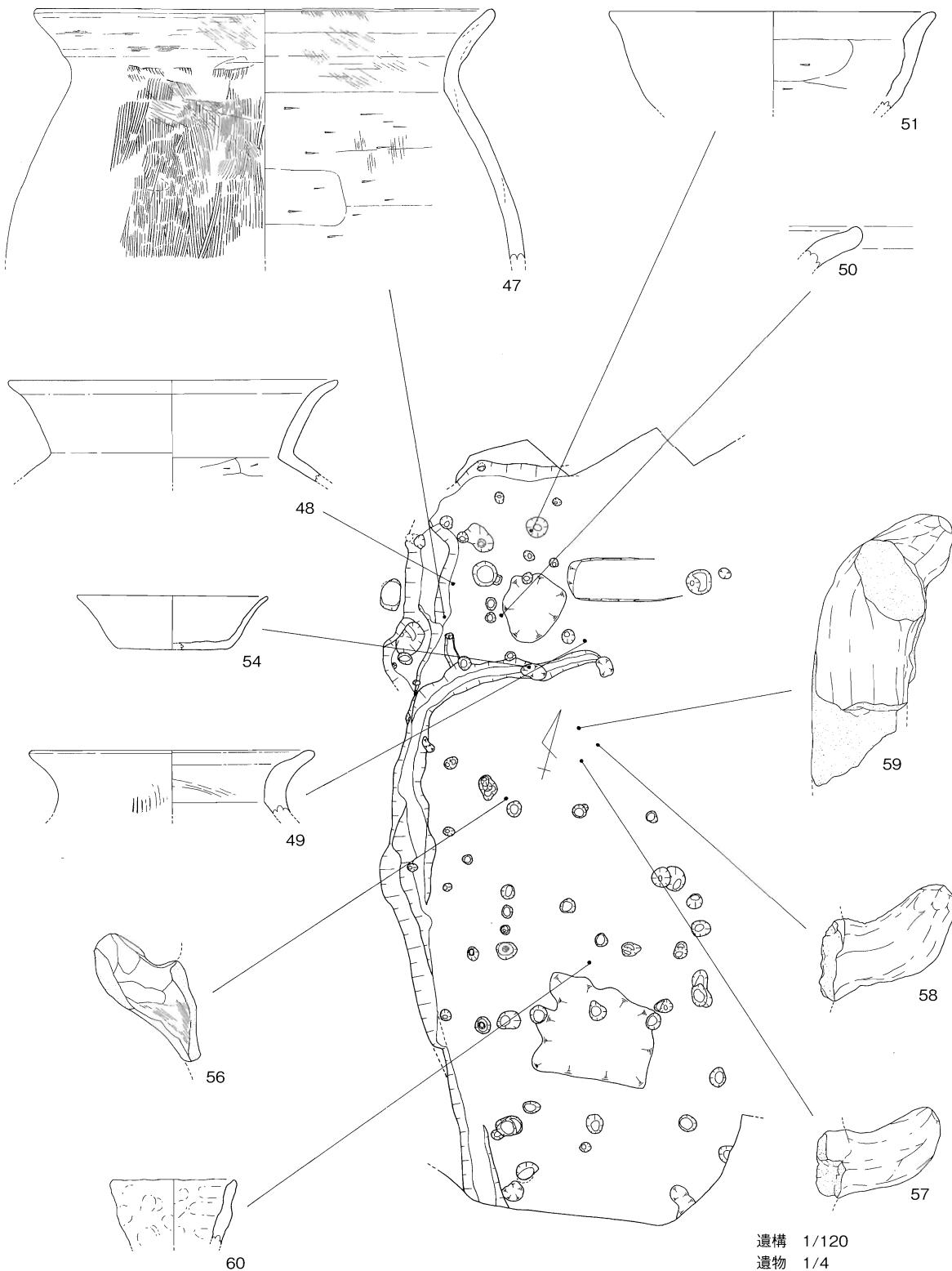
遺物は土師器の甕、鉢（小形の鍋かもしれない）などが出土している（第28図）。甕口縁部の特徴から平安時代の須恵器に併行することがわかり、C-1加工段堆積土上層の出土遺物と焚火との関連に思い至った。



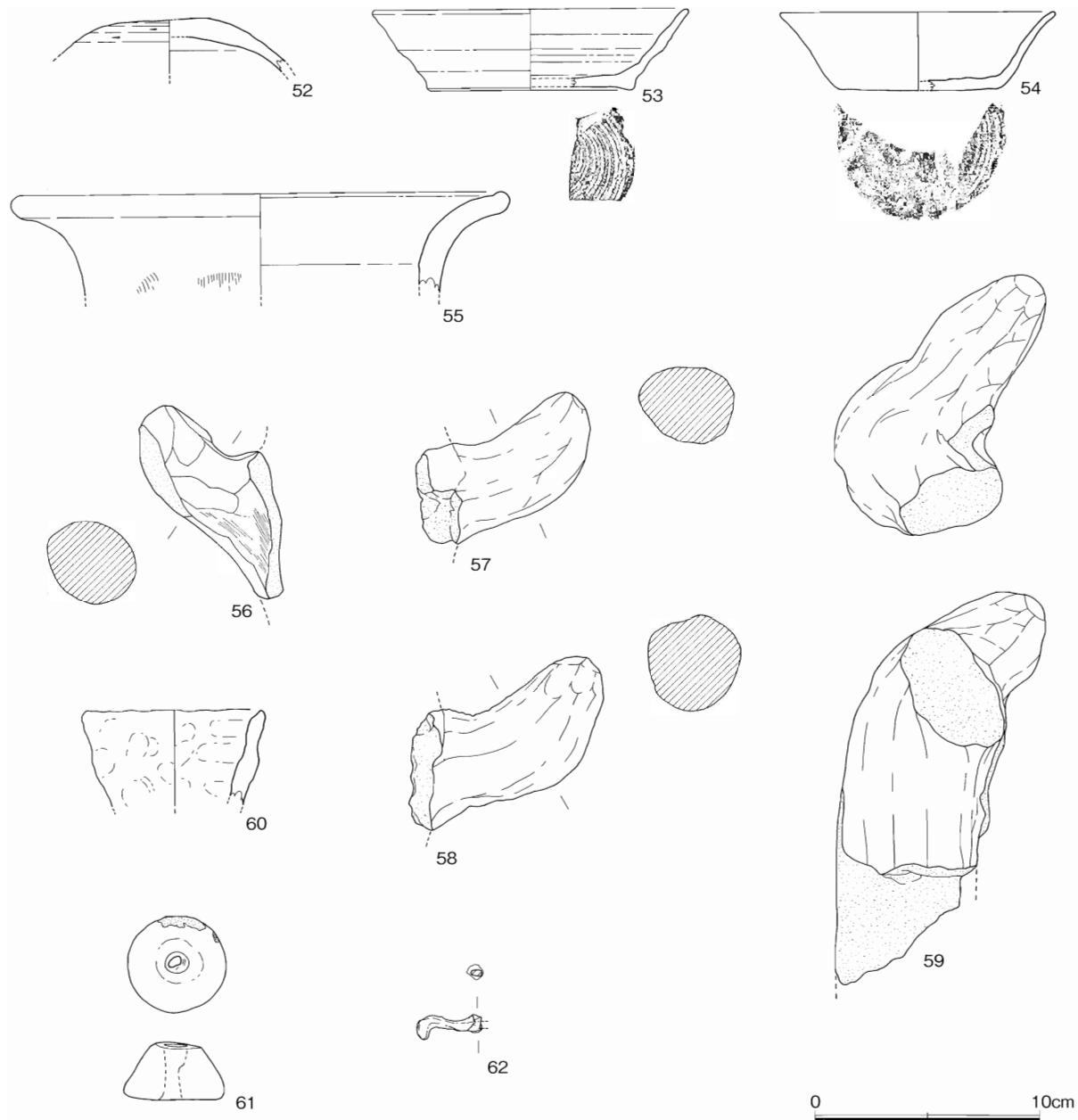
第26図 C-2加工段SB-07実測図



第27図 C-2加工段出土遺物実測図



第28図 C-2加工段・C-1加工段上層遺物出土状況図



第29図 C-1 加工段上層出土遺物実測図

出土遺物（第28図） 第28図48~50は口縁部の内面に窪みと稜線が入る特徴を持った甕、48はくの字状に屈曲した頸部から外傾してのびる口縁部が端部近くで外反して終わる薄手の甕、51は鉢状の形態をしているが小形の鍋とも思われるものである。

第29図52は須恵器壺蓋の天井部片、53、54は底部を糸切りする須恵器の壺である。55は口縁部内面に窪みと稜線の入る土師器の甕、56~58は甕の把手、59は土製支脚で1突起と下半部を欠損したものである。60は製塙土器で、色調は淡橙褐色を呈し、内外面に指頭圧痕が顕著である。61は土製の紡錘車、62は鉄製の留め金と思われる。

C-2加工段の時期 口縁部内面に特徴のある甕、鍋状の土師器、須恵器の糸切りの壺の形態などから、平安時代の9世紀後半代と考えられる。

(6) A-3区小加工段 (第30図)

位置・形状・規模 A-3加工段の南東側で検出した加工段である。半円形の加工段と三日月形の加工段がつながったような形状である。埋土はどちらも同じやや暗～黒褐色土であり切り合いは見られなかったため、不整形ではあるが一つの遺構として考えた。残存長4.2m、残存幅2m余り、壁最大高20cm、平坦面の標高13.2mを測る。

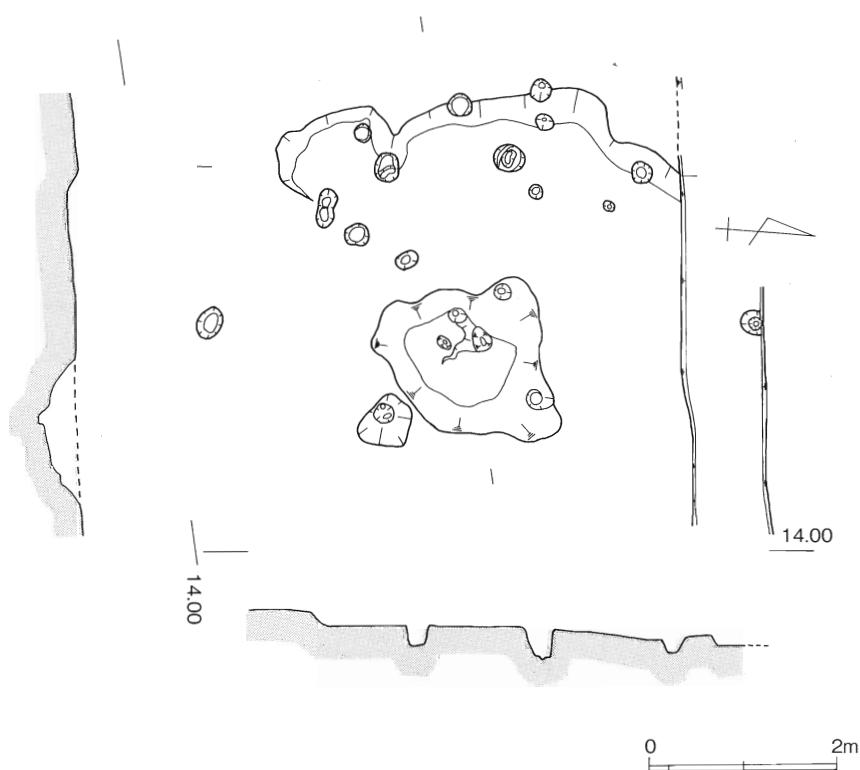
ピット 平坦面で10穴、上端付近で2穴のピットを検出した。それらの内、P1～P3は径20～30cm、深さ20～30cmの比較的しっかりしたピットであったが東側につながるピットが見つからず建物跡を想定するにはいたらなかった。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。なお、加工段東端で見つかった一辺1.5m、深さ40cmのいびつな方形の掘り込みは、埋土が黒褐色土と黄褐色土が大きなブロック状で混在し、一時に埋められた状況であった。A-1加工段の土壤と同じく、根回しなどのごく新しい搅乱層であると思われる。

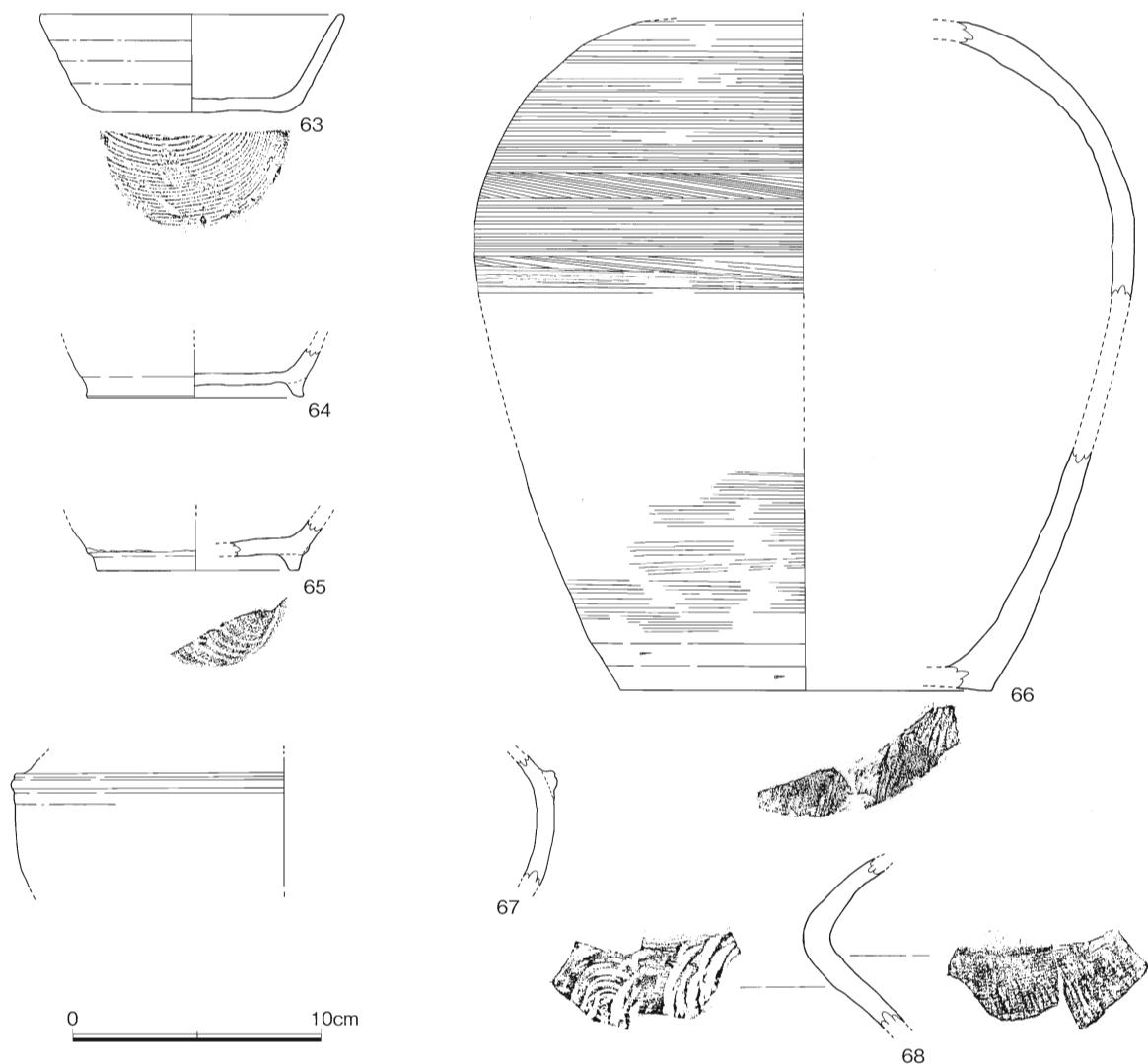
(7) 遺構外の出土遺物 (第31図)

A-1区の上層から東側斜面にかけて平安時代の須恵器類が散乱して出土した。

第31図-63は底部糸切りの無高台の壺、64、65は高台付きの壺である。66は平底の壺で、肩から胴部にカキ目が一面に施されている。67は肩部に突帯を廻らせた壺、68は甕の頸部から肩部の破片である。接合はしないものの同一個体の破片が多数出土している。



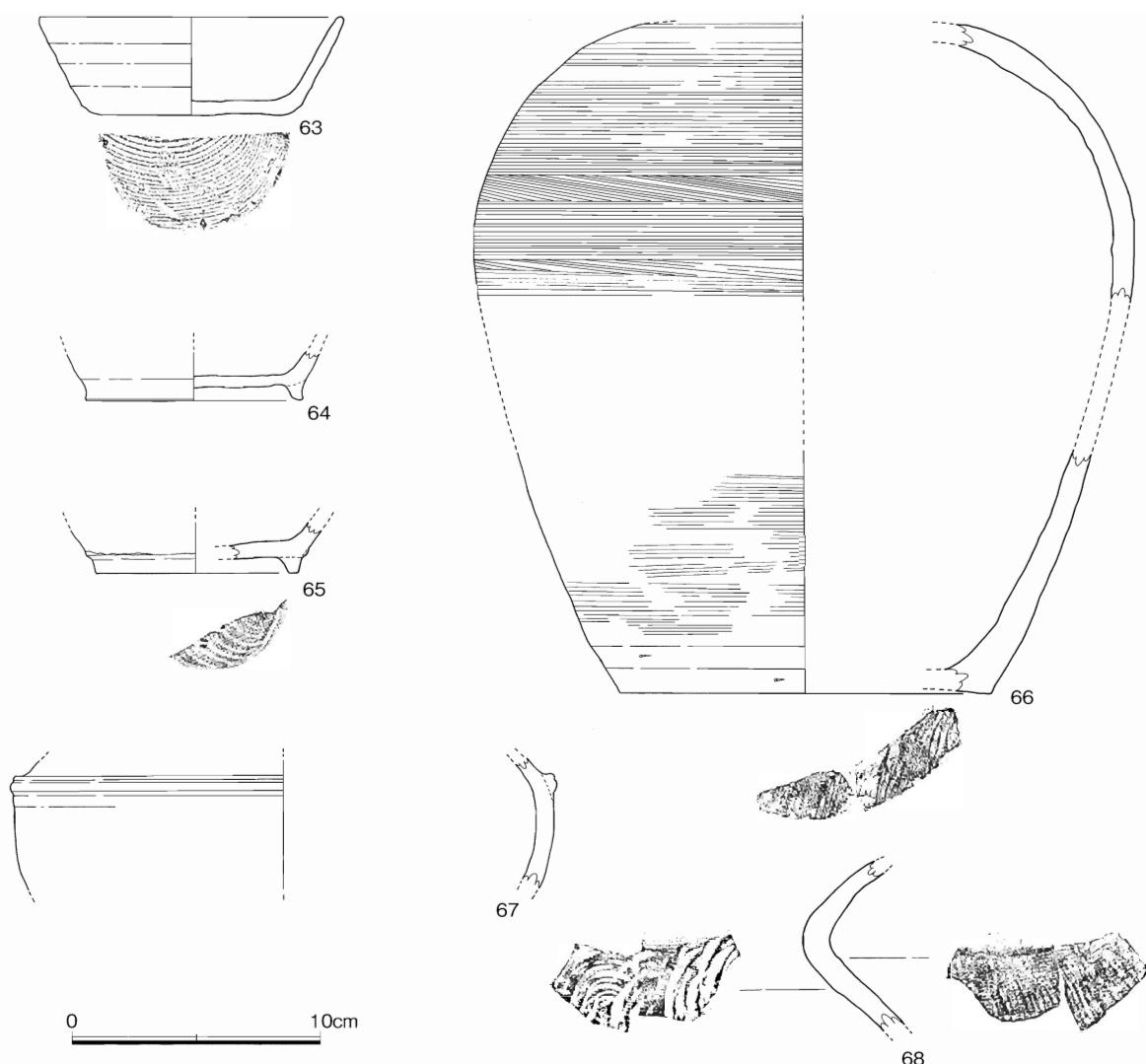
第30図 A-3区小加工段実測図



第31図 遺構外（A-1加工段上層～東側斜面）出土遺物実測図

参考文献

- 山根克彦『絵と写真でたどる生馬の歴史』2003 生馬公民館
- 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994
- 山陰中世土器検討会『平安時代前期の土器様相－中国地方を中心に－』 第4回山陰中世土器検討会資料集 2005
- 岩橋孝典「出雲地域における飛鳥・奈良時代集落について」『古代文化研究』第13号 2005
- 熱田貴保・深田浩・東山信治『田中谷遺跡・下がり松遺跡・角谷遺跡・塚山古墳』島根県教育委員会 2002
- 石川崇『久米遺跡・久米A遺跡・久米B遺跡』松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2000



第31図 遺構外（A-1加工段上層～東側斜面）出土遺物実測図

参考文献

- 山根克彦『絵と写真でたどる生馬の歴史』2003 生馬公民館
 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994
 山陰中世土器検討会『平安時代前期の土器様相－中国地方を中心に－』 第4回山陰中世土器検討会資料集 2005
 岩橋孝典「出雲地域における飛鳥・奈良時代集落について」『古代文化研究』第13号 2005
 热田貴保・深田浩・東山信治『田中谷遺跡・下がり松遺跡・角谷遺跡・塚山古墳』島根県教育委員会 2002
 石川崇『久米遺跡・久米A遺跡・久米B遺跡』松江市教育委員会・財團法人松江市教育文化振興事業団 2000

IV 結び

今回の調査で検出した遺構と遺物を概観すると、遺跡に6世紀末と9世紀後半の2時期があることがわかる。

まず6世紀末には4箇所の加工段に延べ6棟（同時期には最大5棟）の掘立柱建物があり、そのうち1棟は高床倉庫で、残りは住居だったものと思われる。出土遺物は須恵器、土師器などの土器類が大半で、食膳具、煮炊具、丹塗りや手捏ねの祭祀用品などの種類があるが、住居五軒分にしては食器も煮炊きの道具も数が少ない。おそらく何かの事情で他の場所へ移動し、短期間で廃絶したものと考えられる。

次に9世紀後半であるが、遺構は日常生活に耐えられるものとは思われず、かといって出土した遺物が特殊なものとも言い難く、量も少ない。平安時代の人間がこの谷奥で何らかの活動を行ったのは確かであるが、その詳細について明らかにすることは困難と言わざるを得ない。

現在のところ、久傳遺跡の近辺では比津小丸山古墳を除けば周知の遺跡はほとんどない状況である。比津小丸山古墳は全長16mの前方後方墳であるが未調査であり時期はよくわかっていない。

やや広く周辺に目を向ければ、幾多の古墳や横穴墓が知られており、集落の調査例も増えつつあるが、本遺跡と同時期の古墳時代後期については無いに等しい。近年調査された田中谷遺跡、下がり松遺跡では弥生時代後期から奈良・平安時代に飛び、古墳時代中期・後期がそっくり抜けている。久米・久米A・久米Bの久米遺跡群も奈良・平安時代の集落跡と言えよう。わずかに久米B遺跡の谷底部で古墳時代終末期の壁体溝を持つ住居の一部が見つかっているのみである。

久傳遺跡の立地について見るとき、時代はやや違うものの田中谷遺跡や久米遺跡群との共通点が見出せる。一帯は低丘陵と谷が細かく入り組んだ地形にあって、丘陵に囲まれた小さな谷の奥部や南向き緩斜面、東向き緩斜面に立地していることであり、これらの地形の場所では集落の埋もれている可能性があり要注意である。

狭い範囲ではあったが今回の調査で古墳時代後期の集落の一端を垣間見ることができ、有意義な調査であった。今後調査例が増え、古墳や横穴墓を造った集団の集落の様相が明らかになっていくことを期待する。



比津小丸山古墳（南東より）

遺物観察表

挿図番号	種別 器種	出土位置	寸法(cm)		形態・文様の特徴	調整	色調	備考
			口径	器高				
12-1	須恵器 坏蓋	A-1加工段 SD-01東肩部	12.6	4.0	肩部は段を持たない 口唇部は薄く上方で肥厚	天井部回転ヘラケズリ	淡灰色	出雲4期
12-2	須恵器 坏蓋	A-1加工段 SD-01内	12.6	3.7	肩部に沈線1条	天井部雑な回転ヘラケズリ	灰色	出雲4期
12-3	須恵器 坏身	A-1加工段 SD-01内			立ち上がりは比較的高く内傾	回転ナデ	淡灰色	出雲4期
12-4	須恵器 坏身	A-1加工段 SD-01東肩平坦面	10.3	4.3	立ち上がりは内傾	底部中央にヘラ切り痕 外周を回転ヘラケズリ	灰色	出雲4期
12-5	須恵器 高坏部	A-1加工段 SD-01内	15.5	3.8	平坦気味の底部から立ち上がり、口縁部やや外反	回転ナデ	淡灰色	
12-6	須恵器 長頸甕	A-1加工段 SD-01内	39.2		口頸部片 外面に波状文2段	回転ナデ	灰色	
13-7	土師器 甕	A-1加工段 SD-01内	15.4		口縁部わずかに外反	ヨコナデ 内面頸部以下ヘラケズリ	赤褐色	内外面共赤色 顔料塗布
13-8	土師器 甕	A-1加工段 SD-01内	16.3		口縁部外反	ヨコナデ 内面頸部以下ヘラケズリ	淡黄橙色	
13-9	土師器 甕	A-1加工段 SD-01内	16.0		口縁部は短く外反 ナデ肩	ヨコナデ、ハケ目 内面頸部以下ヘラケズリ	淡黄色	
13-10	土師器 甕	A-1加工段 平坦面上	22.2		口縁外面中央部肥厚	ヨコナデ 内面頸部以下ヘラケズリ	淡黄色	
13-11	土師器 高坏脚部	A-1加工段 SD-01底面	底径 16.4		ハの字に開き、脚端部は平坦 氣味に伸びる	外面ハケ後ミガキ 内面ヘラケズリ	淡黄褐色	外面赤色顔料
13-12	土師器 高坏脚部	A-1加工段 SD-01内	底径 10.6		ハの字に開き、脚端部は平坦 氣味に伸びる	外面ハケ後ミガキ 内面ヘラケズリ	橙色	外面赤色顔料
13-13	土師器 高坏脚部	A-1加工段 SD-01下層	底径 9.5		ハの字に開き、脚端部は平坦 に屈曲	外面ハケ後ミガキ 内面ヘラケズリ	橙色～黄橙色	外面赤色顔料
13-14	土師器 土製支脚	A-1加工段 平坦面上埋土	底径 9.6		底部片 上げ底	指頭圧痕、ハケ目	黄橙色	
13-15	土師器 坏	A-1加工段 SD-01内	9.6	5.5～ 6.6	手づくね 器壁厚い	ハケ目、指頭圧痕	黄色	
14-16	須恵器 坏蓋	A-1加工段 SD-02内	13.6		肩部に鈍い稜(段)を持つ 天井部平坦	天井部回転ヘラケズリ	灰色	出雲4期
14-17	須恵器 坏身	A-1加工段 SD-02東側肩	12.0	4.2	立ち上がりは比較的高く内傾	底部回転ヘラケズリ	灰色	出雲4期
14-18	土師器 甕	A-1加工段 平坦面上	16.6		口縁部外反	ヨコナデ 内面頸部以下ヘラケズリ	褐色～櫻褐色	外面スス付着
14-19	土師器 甕	A-1加工段 SD-02内	17.4		口縁部外反	外面ハケ後ヨコナデ 内面頸部以下ヘラケズリ	暗黄色	
14-20	土師器 甕	A-1加工段 SD-02内	20.6		口縁部短く外傾	外面ハケ目、ヨコナデ 内面頸部以下ヘラケズリ	黄色	
14-21	土師器 甕	A-1加工段 SD-02内	17.8		口縁部外反 ナデ肩	風化	淡黄褐色	
14-22	土師器 高坏部	A-1加工段 SD-02内	15.6		内湾気味に伸び、口縁内面端 部近くで肥厚	内外面ハケ目	黄褐色	内外面共赤色 顔料塗布
17-23	須恵器 坏蓋	A-3加工段 黒褐色土	13.7		肩部に鈍い段あり	天井部回転ヘラケズリ	暗灰色	出雲4期
17-24	須恵器 高坏脚部	A-3加工段 壁溝埋土	底径 10.8		透かしあり	回転ナデ	灰色	
17-25	土師器 甕	A-3加工段 黒褐色土	19.3		口縁部強く外反 肩部は張る	ヨコナデ 内面頸部以下ヘラケズリ	橙色	
17-26	土師器 甕	A-3加工段 黑色土	18.9		くの字状の口頸部	ヨコナデ 内面頸部以下ヘラケズリ	黄褐色	
17-27	土師器 甕	A-3加工段 黒褐色土	19.7		くの字状の口頸部	ヨコナデ	橙～明黄褐色	
17-28	土師器 甕	A-3加工段 暗褐色土	19.4		口縁部強く外反	ヨコナデ 内面頸部以下ヘラケズリ	橙色	
17-29	土師器 甕	A-3加工段 暗褐色土	22.4		口縁部外反	ヨコナデ 内面頸部以下ヘラケズリ	橙～明黄褐色	
17-30	土師器 把手	A-3加工段 黑色土			瓶の把手か	ヘラケズリ 胴部にハケ目	淡橙色～ 淡灰褐色	
17-31	鉄器 鉄斧	A-3加工段 暗褐色土	長さ 6.8	幅4.6	袋状鉄斧			
19-32	須恵器 坏身	B-1加工段 P-4脇のピット中			口縁部の小片 立ち上がりは比較的高く内傾	回転ナデ	灰色	出雲4期
24-33	須恵器 坏身	C-1加工段 遺構面上暗黃灰色土			口縁部の小片 立ち上がりは比較的高く内傾	回転ナデ	灰色	出雲4期
24-34	須恵器 坏身	C-1加工段 壁溝土上層			口縁部の小片 立ち上がりは比較的高く内傾	回転ナデ	淡灰色	出雲4期
24-35	須恵器 高坏	C-1加工段 壁溝上層暗灰褐色土	底径 10.8		長台形の透かし孔	回転ナデ	灰色	
24-36	土師器 甕	C-1加工段 灰褐色土			口縁部外傾	ハケ目、ヨコナデ	淡灰色～淡褐色	

挿図番号	種別器種	出土位置	寸法(cm)		形態・文様の特徴	調 整	色 調	備 考
			口径	器高				
24-37	土師器甕	C-1加工段 灰褐色土			口縁部外反	ヨコナデ、ハケ目 内面頸部以下ヘラケズリ	淡褐色～ 淡黒色	
24-38	土師器甕	C-1加工段 壁溝埋土下層	13.0		口縁部は外反して伸びる 胴部は張り出す	ヨコナデ 肩～胴部は風化	橙褐色	内外面炭化物 付着
24-39	土師器甕	C-1加工段 灰褐色土	23.6		口縁部外反	ハケ目、ヨコナデ 内面頸部以下ヘラケズリ	褐灰色～ にぶい黄橙色	
24-40	土師器甕	C-1加工段 壁溝埋土上層	21.2		くの字状の口頸部 口縁外面中程やや肥厚	ハケ目、ヨコナデ 内面頸部以下ヘラケズリ	にぶい黄橙色	
24-41	土師器甕	C-1加工段 灰褐色土	24.5		口縁部外反 ナデ肩	ハケ目、ヨコナデ 内面頸部以下ヘラケズリ	淡褐色	
24-42	土師器甕	C-1加工段 壁溝埋土上層			基底部片	ハケ後ナデ 指頭圧痕	黄橙褐色	
25-43	須恵器 坏蓋	C-1加工段西斜面 暗褐色土	13.4	3.8	肩部に2条の沈線 口唇やや上部に沈線1条	天井部回転ヘラケズリ	灰色	
25-44	須恵器 坏蓋	C-1加工段西斜面 暗灰褐色土			肩部に鈍い稜あり 口唇内面に細い沈線1条	天井部回転ヘラケズリ	灰色	
25-45	須恵器 坏身	C-1加工段西斜面 淡褐色土	10.7	3.3	立ち上がりは比較的高く内傾	底部回転ヘラケズリ	オリーブ灰色	
25-46	土師器甕	C-1加工段西斜面 暗褐色土	21.6		口縁部外反 ナデ肩	ハケ目、ヨコナデ 内面頸部以下ヘラケズリ	黄褐色	
28-47	土師器甕	C-2加工段 灰黄褐色土			口縁部内面に窪みと稜線	ヨコナデ、ハケ目 内面頸部以下ヘラケズリ		
28-48	土師器甕	C-2加工段 灰黄褐色土	21.2		口頸部はくの字に屈曲 口縁端部近くで外反	ヨコナデ 内面頸部以下ヘラケズリ	橙色～ 灰黄褐色	
28-49	土師器甕	C-2加工段 灰黄褐色土	18.4		口縁部強く外反 口唇内面に若干の窪みあり	ハケ目、ヨコナデ 内面頸部以下ヘラケズリ	明褐色～ 明赤褐色	
28-50	土師器甕	C-2加工段 灰黄褐色土			口縁部小片 口唇内面に窪みあり	ヨコナデか	明赤褐色～ 橙色	
28-51	土師器鍋	C-2加工段 灰黄褐色土	20.1		逆ハの字状に開く	外面風化 内面ヨコナデ、ヘラケズリ	橙色	
29-52	須恵器 坏蓋	B-1～C-1区上層 暗～黒褐色土			口縁部欠損	天井部回転ヘラケズリ	灰色	
29-53	須恵器 坏	B-1～C-1区上層 暗褐色土	14.0	3.6	口縁部外傾	底部回転糸きり 回転ナデ	淡灰色	平安時代
29-54	須恵器 坏	B-1～C-1区上層 暗灰褐色土	13.2	3.5	口縁部は外反して伸びる	底部回転糸きり 回転ナデ	褐灰色～ にぶい黄橙色	平安時代
29-55	土師器甕	B-1～C-1区上層 暗褐色土	22		外反する口縁部 口唇内面にくぼみ有り	ヨコナデ、ハケ目 内面頸部以下ヘラケズリ	明赤褐色	
29-56	土師器把手	B-1～C-1区上層 黑色土			甕の把手か	ハケ目	橙～褐灰色	
29-57	土師器把手	B-1～C-1区上層 黑色土			甕の把手か	風化	灰桃～暗桃色	
29-58	土師器把手	B-1～C-1区上層 黑色土			甕の把手か	風化	灰褐～橙褐色	
29-59	土師器 土製支脚	B-1～C-1区上層 黑色土	残存高 17.3		胴部と1突起のみ残存	ハケ目、ヘラナデ	燈褐色	
29-60	土師器 製塗土器	B-1～C-1区上層 暗褐色土	7.7		胴部から口縁部は外傾 器面の凹凸顯著	ナデ、指頭圧痕	橙黄色	
29-61	土製品 紡錘車	B-1～C-1区上層 黑褐色土	最大径 4.5	2.6	二方向から穿孔	ナデか	灰～黄灰色	
29-62	鉄製品 留め金	B-1～C-1区上層 暗灰褐色土	残存長 2.9	最大厚 0.5				
31-63	須恵器 坏	A-1区 暗褐色土	12.2	7.0	口縁部は外傾して伸びる	底部回転糸きり 回転ナデ、ナデ	灰色	平安時代
31-64	須恵器 坏	A-1区東側斜面 暗褐色土	底径 8.6		高台底部端に貼付	底部回転糸きり	灰色	平安時代
31-65	須恵器 坏	A-1区東側斜面 暗褐色土	底径 8.2		高台底部端に貼付	底部回転糸きり	灰色	平安時代
31-66	須恵器壺	A-1区 暗褐色土	底径 15.0		平底の壺 口縁部欠損	外面カキメ 内面回転ナデ	灰色	平安時代
31-67	須恵器壺	A-1区東側斜面 暗褐色土			肩部に突帯をめぐらす	風化	淡灰色	平安時代
31-68	須恵器甕	A-1区 暗褐色土			くの字状に屈曲する口頸部	外面平行叩き 内面同心円押し当て具痕	灰色	

図版

図版 1



久傳遺跡 調査前（北東より）



久傳遺跡 調査後（東より）



A-1 加工段 第1遺構面 (SB-01、02) (南より)



A-1 加工段 第1遺構面 (SB-01、02) (北より)

図版3



A-1 加工段 第1遺構面
溝内遺物出土状況



同上

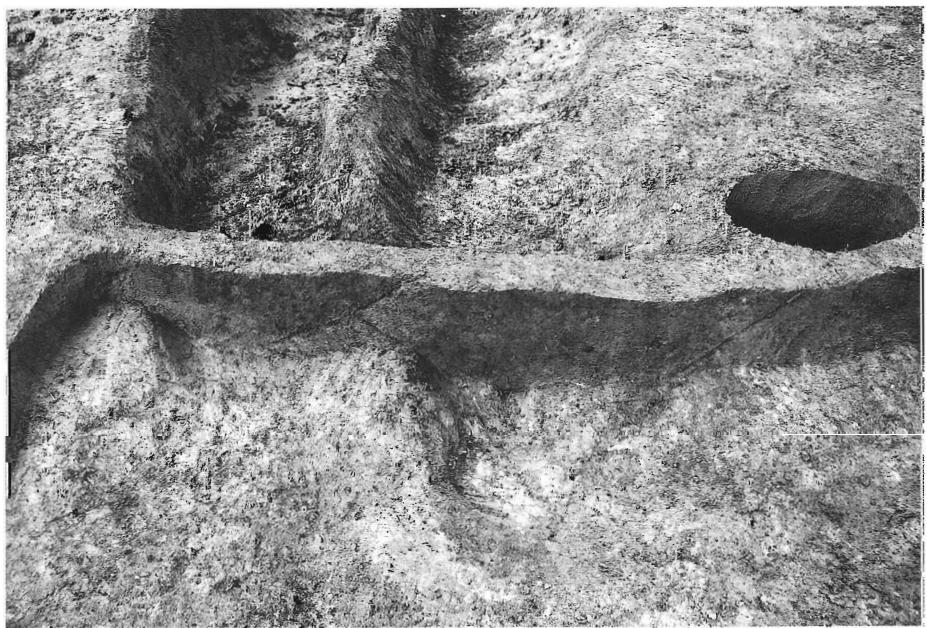


A-1 加工段 遺物出土状況

図版 4



A-1 加工段 第2遺構面



A-1 加工段 第1遺構面と第2遺構面の溝の切り合い

図版 5



A-3 加工段 総柱建物跡 (SB-03)



同上 壁際埋土中遺物出土状況 (須恵器、高坏)

図版 6



B-1 加工段 平面プラン検出時

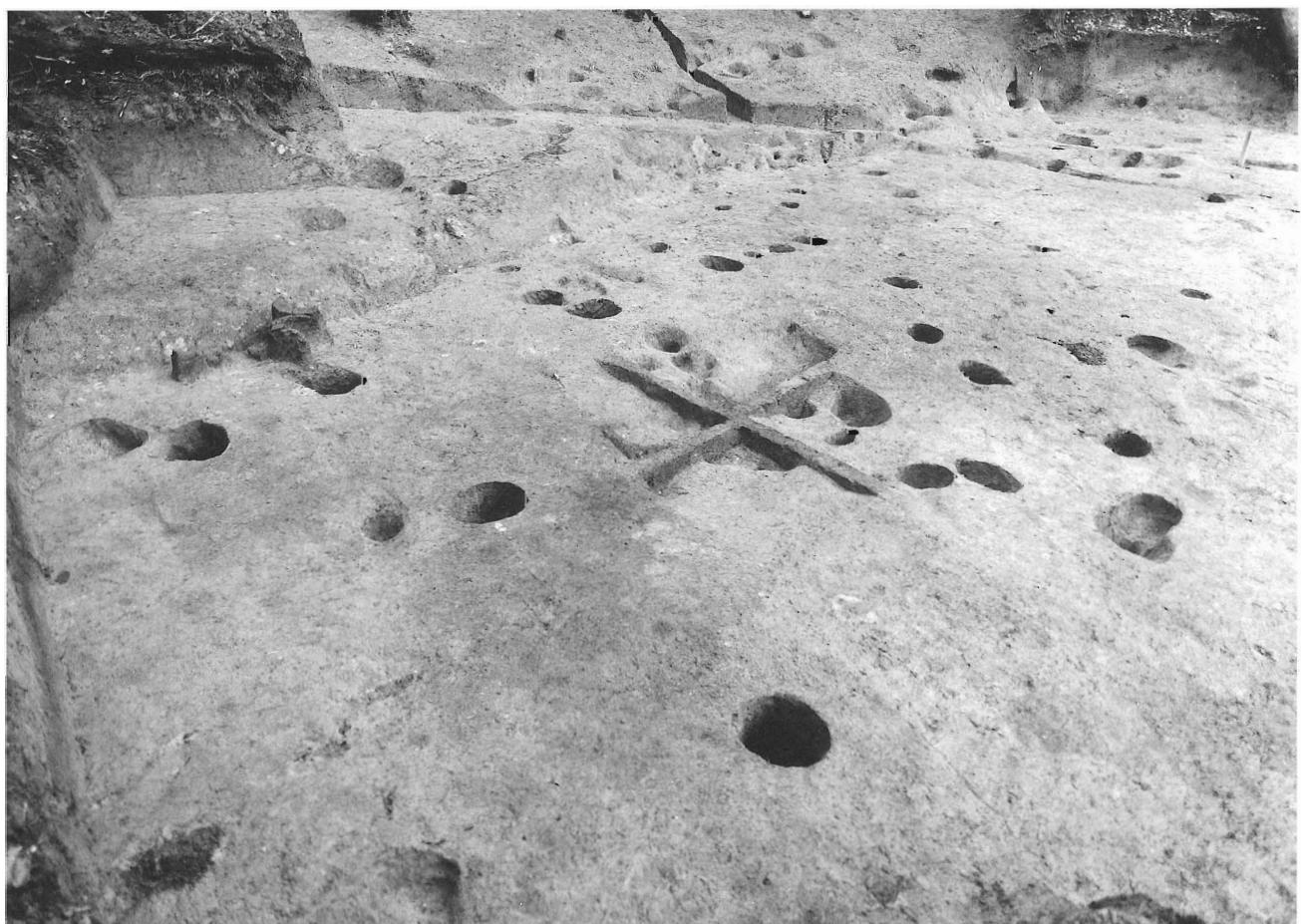


B-1 加工段 掘立柱建物跡 (SB-04) (北より)

図版 7



C-1 加工段 全景（東より）



同上（南東より）

図版 8



C-1 加工段 平面プラン検出時

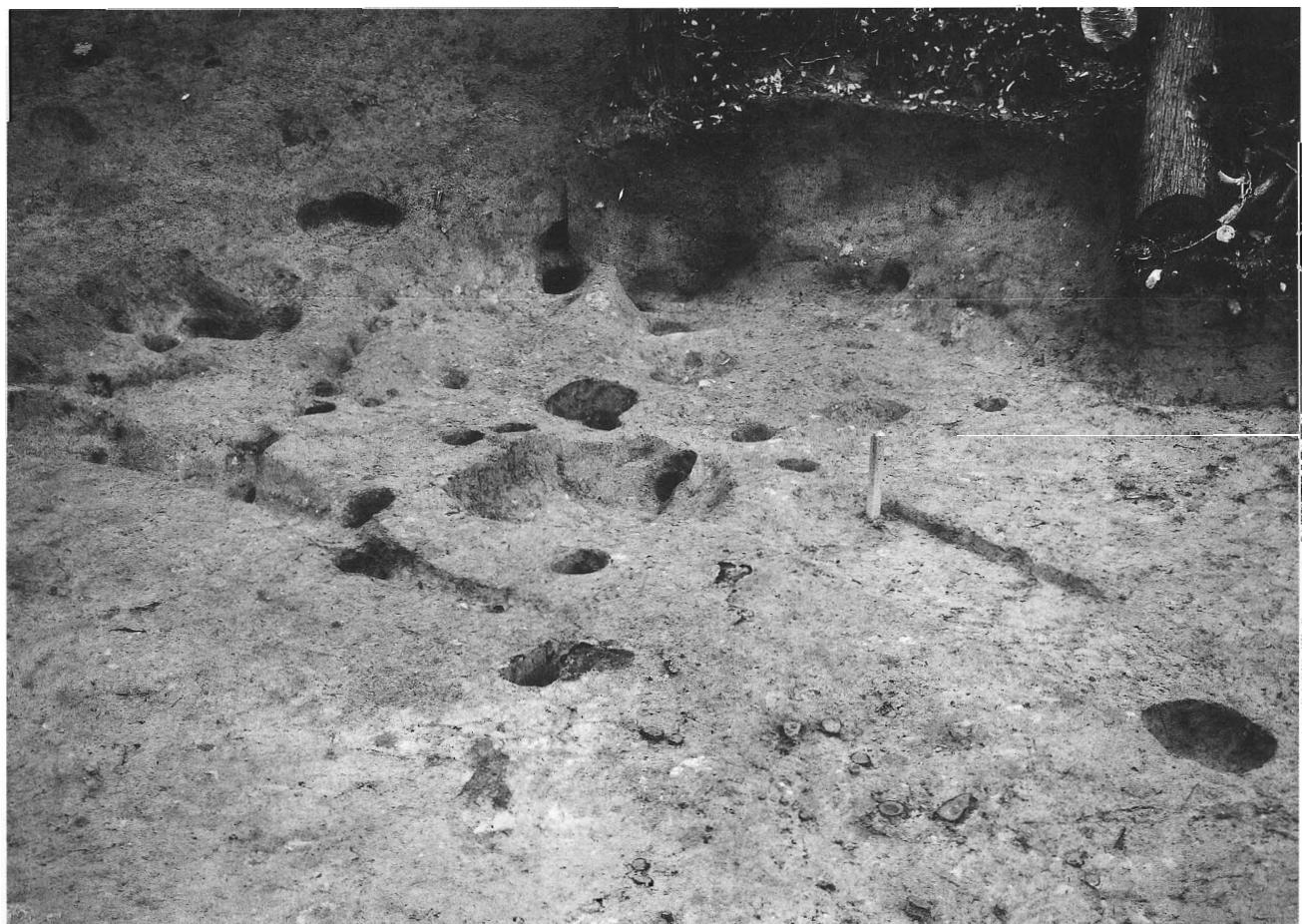


C-1 加工段 堆積土層と遺物出土状況

図版 9



C-1 加工段～C-2 加工段



C-2 加工段（南東より）



C-2 加工段
遺物出土状況（土師器、甕）

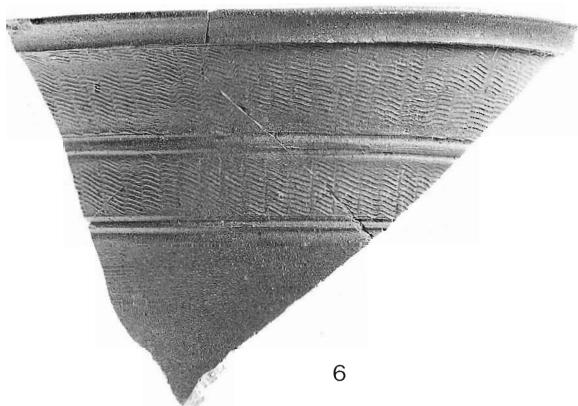
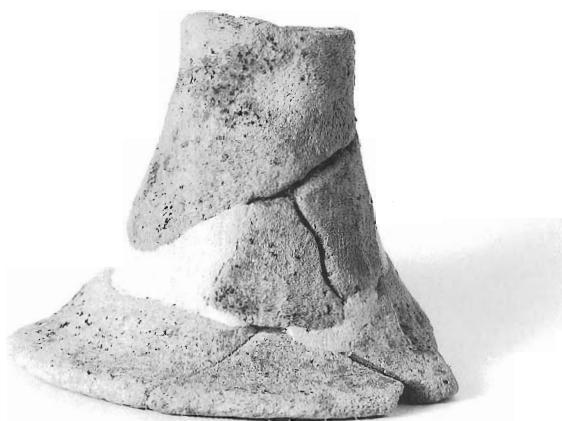


A-3区 小加工段



方形土壙

図版 11



A-1 加工段 第1遺構面出土遺物（1）



8

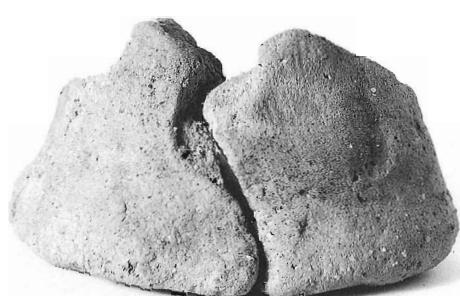
10



9



12



14



13



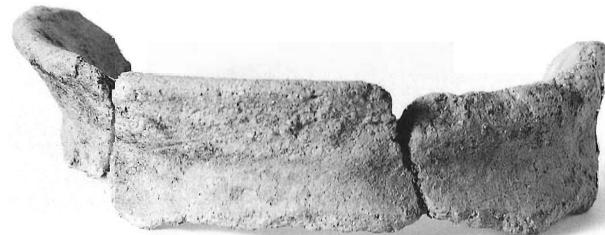
15

A-2 加工段 第1遺構面出土遺物（2）

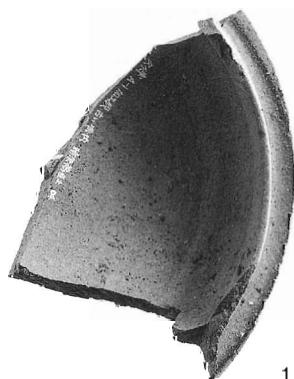
図版 13



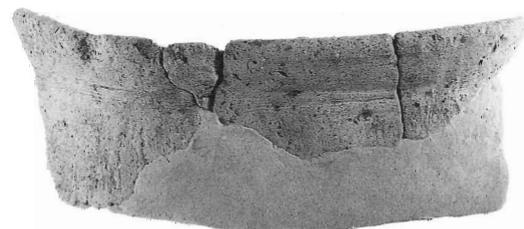
16



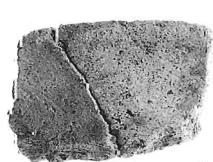
18



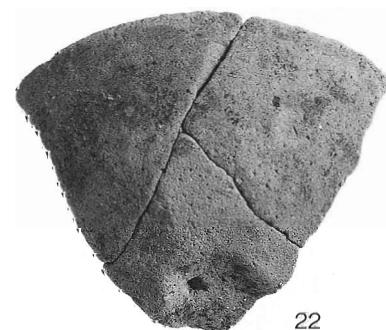
17



20



19

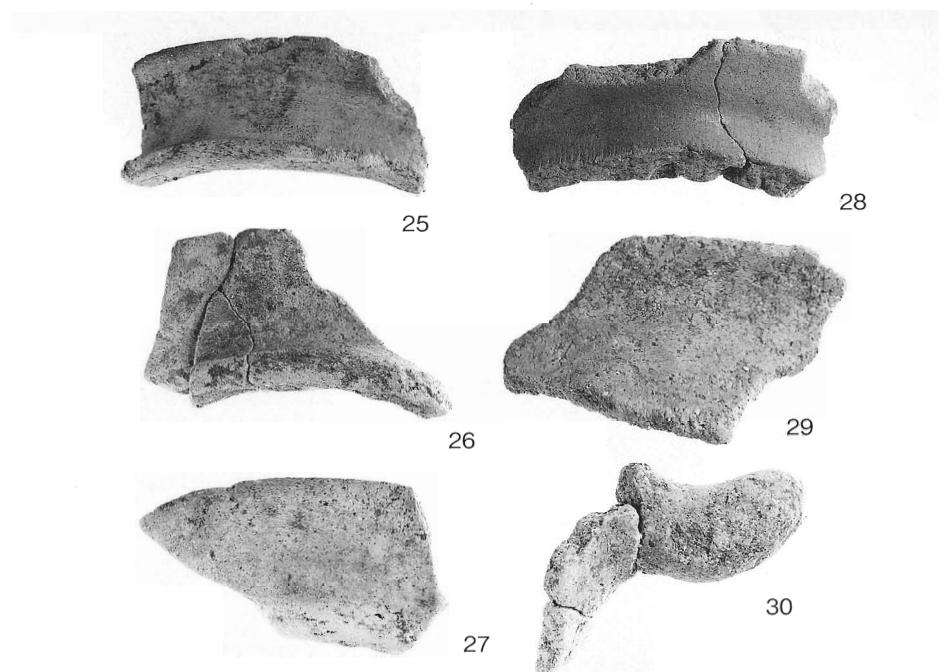
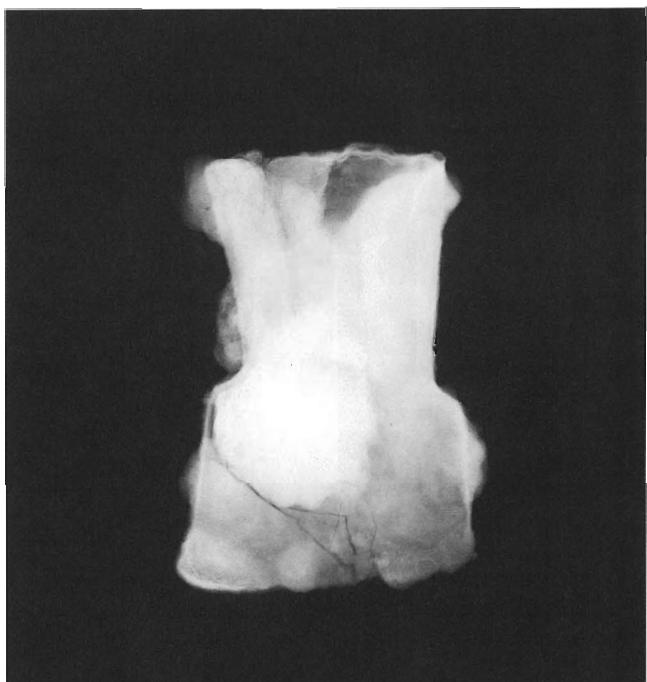
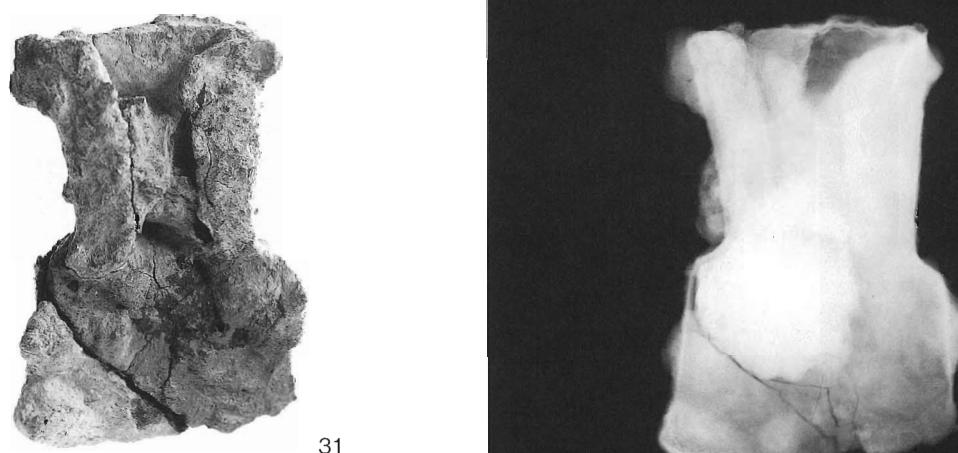


22



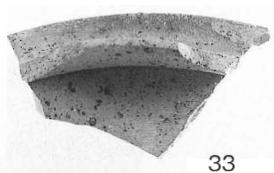
21

A-1 加工段 第2遺構面出土遺物



23~31 : A - 3 加工段 出土遺物
32 : B - 1 加工段 出土遺物

図版 15



33



34



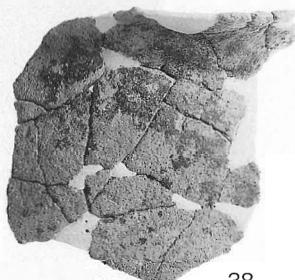
35



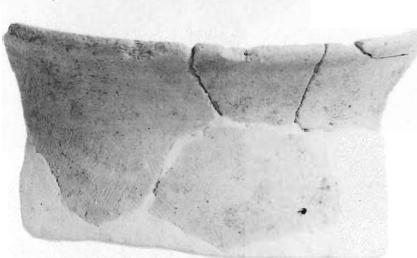
36



37



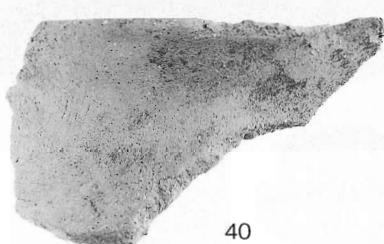
38



41



39



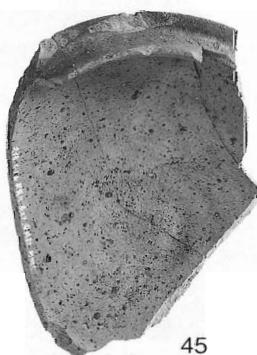
40



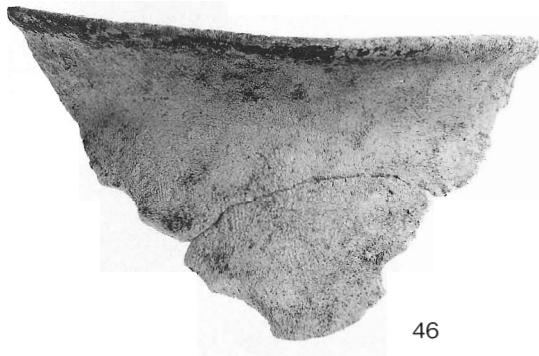
42



43

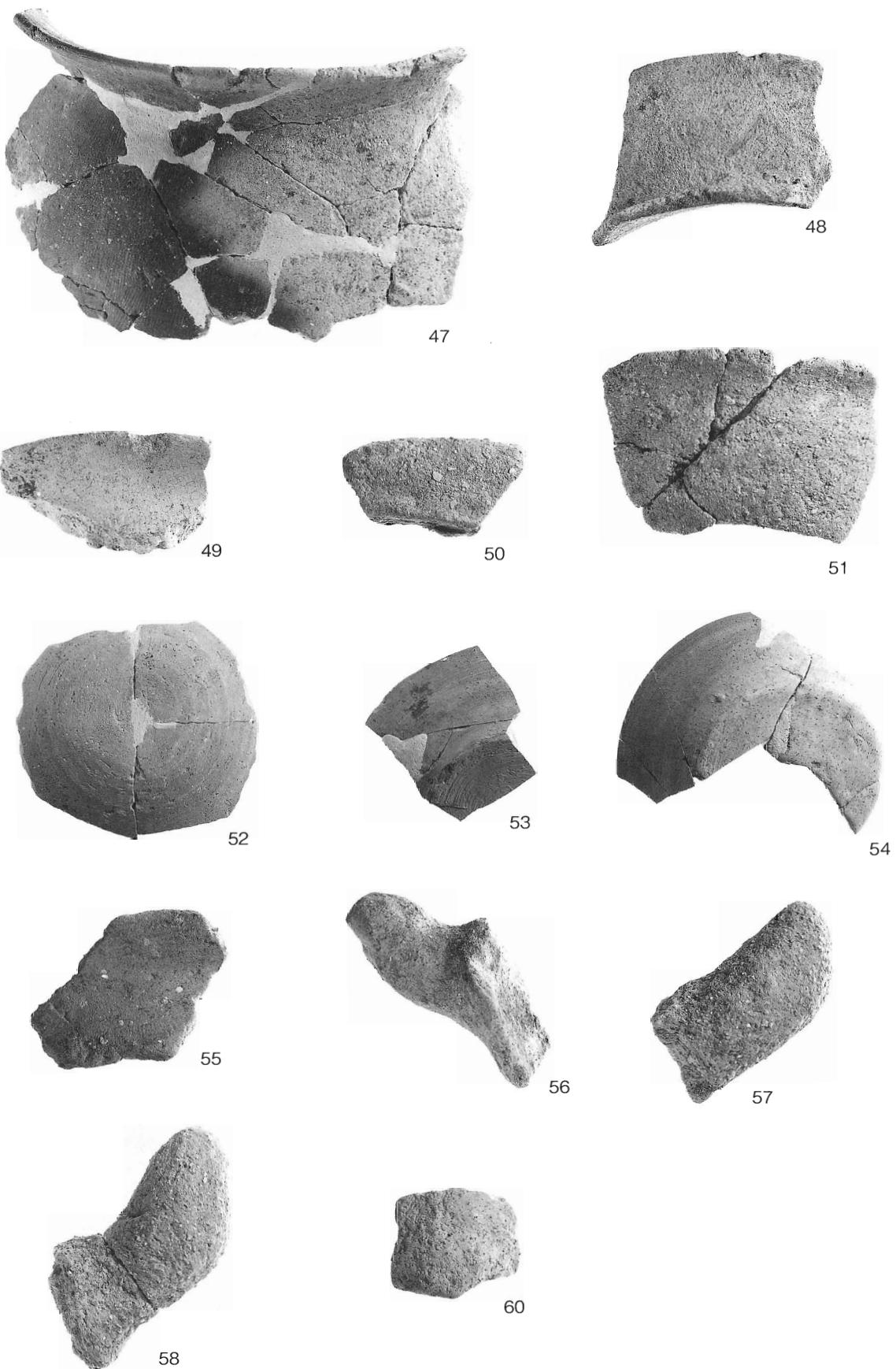


45



46

33~42 : C-1 加工段 出土遺物
43~46 : C-1 加工段西側 出土遺物



47~51 : C-2 加工段 出土遺物
52~62 : C-1 加工段上層 出土遺物

図版 17



59



61



62



63



68



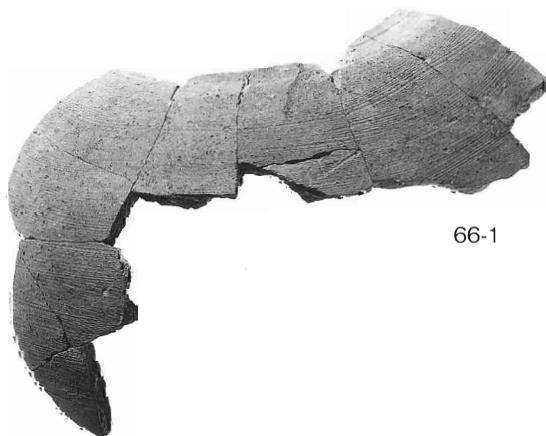
64



65



67



66-1



66-2

59~62 : C-1 加工段上層 出土遺物
63~66 : A-1 加工段上層～東側斜面 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	くでんいせき							
書名	久傳遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	松江市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第100集							
編著者名	瀬古諒子							
編集機関	松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団							
所在地	〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL 0852 (55) 5294							
	〒690-0886 島根県松江市母衣町180-21 TEL 0852 (28) 2065							
発行年月日	2006年(平成18年)3月20日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
種別		市町村	遺跡番号					
久傳遺跡	島根県 松江市 比津町	32201	K-62	35° 28' 39"	133° 02' 15"	2004.10.4 ～ 12.27	630 m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
久傳遺跡	集落	古墳時代後期	住居跡	須恵器(蓋坏、高坏、甕) 土師器(甕、高坏、甌、竈)				
		平安時代		須恵器(坏、壺、甕)				

久傳遺跡

2006年3月

発行 松江市教育委員会
(財)松江市教育文化振興事業団

印刷 有限会社高浜印刷
松江市東長江町902-57番地